謡曲拾葉抄

堺 拾
槍 頃
鶏鳴小町
卒都婆小町
関寺小町
九

姨捨

大和物語に信濃の国更科といふ所に男住みけり。
さてさて河ふ親しい乞ひ姨をもち親のごとく
思ひ侍ふあるに。此ものいとんうさるもあり
くて。此姑乃老ひくるを。つねに
ふくて男ありけり姨のこんさぐるもいき
うをつひさうせくまい。若のごとくもも
あるを。おろうるもあり。此姨のもあふ
成ふ。此姨いとうる若く二重ぬて居る。
於ものを思せうて今すぐ死なぬるを
おもひく。をていまさふ捨侍て

まこのこ賣(セメ)ゝまいつ月乃いてあうさ歌女ゐて
もいざ行へ。幸ふたゝとさゝらぎて。うんせ
らんこいひこ。うさ負くいて泳くゝの禁ふ
仮ゝまい。さゝふつゝくへくうさりなく
ゐゝの畏乃おゝくくもいゝめふ寿くゆて
きぬやこゝへた。いくへもせぐ歌ふゆりきて
おりひおゝふ。いひちくゝちくうゝつまど。
毒法歌のこゝく寿ひつて。お孫ふゝんいて
うゝくゝ見こゝゝ。世ゝのとゝ月のいて
かさうゝくあうくて出ゝゐを海めつて。歌日
とよいも孫ゝまでどうゝくゝ見こゝゝまい

歌ふゝゝあこゝゝ史科やとこすてゝふてゝ月とこて
こゝみくゝ又いこさて むうくゝ西こくゝふゝゝ。ゝまこ
ゝまのちゝんこすてゝこいひゝゝくゝ
又後頼は、説ふ云法の玉史科歌ふをこすて
ゝこ云ゝゝ。若こ人のめいとゝみゝくゝ毒朱
中ゝひゝゝ。母のゝこ毒若くむつゝ
うゝまい。八月すゑ夜の月乃くまゐうゝゝ
世母ゝこふをゝのかせくゆゝふゝ。
ゝ一人ゝのいてぐこふ若く夜もすゝ月と
ゝくゝ泳ゝゝ。さゝこふゝゝりゝゐゝ
ゝまいこゝうふ立ゆゝくゝ変ゝまい世ゐを

うち添めく泣(ナキ)ぬるとぞ

今業世流い姨ゞ世ゞをよめるし。又大和物語の流い翔(カケ)りあるし。いつきうをるる。今昔物語よりけるゆ要く出うり。そ流大和物語より置(ヒト)し

月の名ちうそ秋なるとや姨棄山を見給ん

月の名ちうゞ故ゞ姨捨山を見給ん

姨捨山い在信州更科郡屋代宿戸倉宿中間ニ向ニ有リ

筑摩川山の中(シン)後(ウラ)ゞ寺ゞり。長ゆるし号をしけ山のめぐりゆ十三所の京ゞり。第一を四毎の月。五月の景。一を山宮ゞ泥るゞてそ風流ゆ

今昔物語云姨捨山其前ハ冠山(カウリヤマ)ゝ云ゆ。山の麓冠の中ゞゞ小(ニ)ゆ(ウ)ゞ

袖中抄云坂東ゞ一ゞ姨捨ゞ国い伝流ゆ。

甲斐ゆ国ものゞり。そんのゆ国ものゞり。我後ゆ

ゆ国ものゞ。其ゞ中ゞ姨捨すゞ山なゆ

月いまゝゞ小ゆ山ゆ月をそ

十 ○ちるゆ姨捨山の月ゆくも影を出るを時のそ 敦実

▲名ゞ小ゆ山ゞ泥を。限ゆゞ月い猶ゞ泥を。

なゆくい山ゞ小泥を。四方い三物小泥を。

▲家ゞ山ゆくゞあゆ紀つ文科や姨捨山ゞ照月を

ゆゆく　世古今集雑上ゞ入。歌家ゞ人

おもかげをとどめ。古今集雅抄云姨をいさなひて
捨てゝ山ふかくいりぬるを出てゝ
歌もよめり。打なびくまで。うすくかすみ
たる。歌ゝ。或抄云二条為氏の歌ふうの
姨の懇念ふかくなりぬるゝ
今は石を姨捨石と号し山の腰ふかく
▲見ぬ小ぶるを桂の本乃張紙若乃姨捨のを
ものさびしくいとゝ　神代巻云門前有二井井
上有二湯津桂樹一矣　源氏花散里巻云おかなる
桂の本乃思ひ出ぬ小系のしたりくいとゝ

後撰云桂の本乃ものさびしくなるがかなしき今も
見まほしう侍ふ　私云古来の文ふ
桂を月中にすむ。神代巻ふ孝経てつる
成へし。此説の桂乃本い月の御ふくゝ
侍ふく照月を見んくと御めしに人の侍るゝい
ゝいつけさう
▲一重山　姨捨山のめぐり十三丈の系乃内
　　壹高
　　の紙の色衣をゝ一重山松印云いうゝるもとも
▲風吹すゝきく　吹しくいあるゝしさるふかの
ひやうるる義也。冷しくゝ平いひて秋の系
月ゝゝ

三文字屋宗牛、新月、色二千里外、古人心
之井寺小沼を

▲明ハてるとも秋のまもるあゝ　今宵の月乃ちさ
のゝうゝ　新勅撰秋上よゝ、權中納言定家ゝ、
下句うゝく月のゝ　ゝ。詞書云、後京極殿
五大堂小侍ける時、月あ十そ、ゝ侍ける小
よめるゝ。ゝの心ゝうゝく月のゝ　ゝ
ゝ。ゝや秋もまるゝ。
今和歌云ゝ時、拾遺後京殿を引く。ゝ
世のゝ小ゝつゝ秀逸ゝ。ゝ
ゝれゝゝ考ゝ。ゝて退散ゝ

紙小世ゝを引ゝ。ゝ
指ゝゝ。全文畧　正微物語云八月廿日
ハ定家ゝの五日ゝ。ゝ初ゝの月ゝ小
世月ゝゝゝ。ゝゝ文秋のゝ
ゝ月乃ゝゝゝ。ゝ
ゝを一ゝを一字つゝ一ゝの乃小ゝ
ゝゝ。世ゝゝゝ
ゝ小ゝゝゝ

▲ゝゝゝゝゝゝ月のゝ之井寺小沼を。白衣
の女人ゝ羽ゝ小ゝを。ゝゝゝゝ安宅小沼を。
▲女郎花の事　女郎花ゝ女郎花小沼を。

衣を脱ぎて女房に奉りて去りぬ。うう
りあさうし八月廿五日
▲ひるの　百万ふるを
▲実や奥ふかうしく為つる奥つくそゆうしを
晋王子猷と云者。山陰と云所に居るが。雪乃
夜。雪晴く月の色清く朗し。其時戴逵と云
者。子猷が友なるが。剡溪と云所に有つるを。
麻裳ひたくに舟に乗く戴逵が居所をぐ
付て門に入る人を見て問い對て曰
乗興而来興尽而返何必見戴安道耶とひて
舟に戴逵に逢とし。安道は戴逵が

▲海潮清光の新。圓しとく海嶠を離
之井寺に紀を
▲超世の悲願　當麻に記を
▲弥陀光明ふかくいるを　無量壽経曰威神光
明最尊第一兵　大弥陀経曰阿弥陀佛光明最尊第
一無比諸佛光明皆所不及也兵
▲去程ふ之光あふ仏ぬるい所は無ぐくあ方ふ
勧いまんがるしうや　そうう已下。勢至菩薩乃
因位をのべる。之光は日月星
須弥四域経曰天地初開之時未有日月星辰縱有

天人来下但用頂光照用尓時人民多生苦悩於是
阿弥陀佛遣二菩薩一名宝應声二名宝吉祥郎代
養女嬪是此菩薩共相籌議向第七天上取其七宝
至此界造日月星辰二十八宿以照天下定其四時
春秋冬夏時二菩薩共相謂言取以日月星辰二十
八宿西行者一切諸天人民盡共稽首阿弥陀佛是
以日月星辰皆悉傾心向彼故西流矣
天地本起経曰阿弥陀佛遣應声吉祥二菩薩為日
月應声是観音吉祥是勢至矣

▲月ハ今の如来の右乃脇士とし〻
月ハ勢至菩薩也と云ふと記せり。

法花文句云名月是宝吉祥月天子大勢至應作矣
右の脇士とい勢至ゆさ〻い如来の右乃脇とと
ゝし。脇ハ另の左右乃脇の下也。士ハ大士也。観経
曰観世音大勢至是二大士侍立左右矣
給出ゆく云々〻〻じの〻ゆさ〻い〻〻〻〻。
脇士と〻ゆ云時い観音勢至の二ゆさ〻ゆ云〻し
有縁をはかるらひさ　観経曰舉身光明照十
方国作紫金色有縁衆生皆悉得見矣
▲重き罪を滅んぞう天上の力をとゝ〻ゆ尓大勢至
とい号すとゝう　観経曰以智慧光普照一切令離
三塗得益上力是故号比菩薩名大勢至矣

疏云明光之體用即並漏為體故名智恵光又能除
息十方三悪之苦名並上力即為用也矣
観経よいを上力とあるを徳よいを天とのかと
ゆらいあるをいう。光上力と有をとんく。光のをと
天のをのふしのやうをうくしんくしう
勢至菩薩ハ観経曰此菩薩行時十方世界一切震
動此菩薩坐時七宝国土一時動揺矣
思益経曰我投足之所振動三千大千世界及魔宮
殿故名大勢至矣　如此威勢通力のうりきを
うるが故ふ大勢至といふ
天冠の間ふ花の光かゆをまの臺の形くふ

他方の浄土をのくいを　勢至菩薩の天冠乃
間ふ西方の浄土のくるを十方の浄土の
浄土表うつり弘るくしを。　観経曰此菩薩天
冠有五百宝華一々宝華有五百宝臺一々臺中十
方諸佛浄妙国土廣長之相皆於中現矣
疏云明佗方土現彼此都並増減矣
玉珠樓の風の音糸竹乃まくべうくふ
此等皆於糸の律調をとる。　往生要集云並
量樂器懸處虚空不鼓自鳴皆説妙法矣
糸竹の調とい絲ハ糸のうをとるを糸竹と作ハ
竹ふくをうる吹ものを

▲ちりあくたの如くに捨てる宝の池乃宝ホトリ
嫉捨ムに十三石の糸の四に宝が池と云ける。
是あを蓮ハいひうけ云。
藻塩草に云ちりのくちとうくちとへ蟻の
巣に似たる也とうに一説ことうく
私云ちりいふもちをとしたもちもの
異名也　長能集云故郷当の娘ふるの
いちんうてちりの法中をとうる
「若くのるまるすうるの深おるちるさ云も我ハ
宝の池い格糸の八切法法をうる。格後ふ法を
りか
ひうちんハのうくの池深法ハいるのちを法さ光

▲ちりやうとは水の死部く　極楽の池乃上の七重
行樹をうる。一行ひとくに小並をうるく極
うるやうに尼ゆ行樹とうへ宮ふるく
あとうるこ。うれやうるまるいい池乃波ふ
云うけうう

▲芳ホウ芳ちうる小孔ミうう　芳芳ハ二字共ふうう
うとうむこ。文選ふうやうう。
説文云芳芳香也ホト兵

▲迦レウ陵頻伽ガのたうひうる　極楽の六種乃鳥の四
也。六種とい白鵠ヒヤクコウ孔雀クジヤク鸚鵡アウム舎利シヤリ迦陵頻伽ビンガ共命ミヤウ也
観経曰水鳥樹林及与ヒト諸仏所出音声皆演ノベト妙法ヲ兵

迦陵頻伽此云妙声鳥妙音鳥也大論曰如迦羅頻
伽鳥在穀中未出発声微妙勝於餘鳥矣
正法念経曰山名曠野其中多有迦陵頻伽出妙音
声如是美音若天若人緊那羅等並能及者唯除如
来音声矣

▲孔雀鶏鵡　孔雀南方異物志曰交趾番羅諸州甚
多生高山喬木之上大如鷹高三四尺不減於鶴細
頸隆背頭裁三毛長寸許數十群飛棲遊囿陵晨則
鳴声相和其声曰都護雌尾短並金翠雄者三年尾
尚小五年乃長二三尺夏則脱毛至春復生自背至
尾有圓文五色金翠相繞如錢自愛其尾山獵公先
擇置尾之地雨則尾重不能高飛南人因往捕之云
弱弱いあふむ小所小沒と
ゑ〜ぬ隈をゐけまいと云色ゑ色ゑとい大勢色のるゝ
云色ゑとい大勢色のるゝ　観経曰但見此菩
薩一毛孔光即見十方並量諸佛浄妙光明是故号
此菩薩名並辺光矣　智礼法師妙宗抄云光照十
方故立並辺光為名矣

▲経色ゑ色ゑ月の有附い新ゑ色又あゑ附い新ゑ色
有為時変の世中乃定めのなきを為めをなり
衆業應報経偈曰日出須臾没月満已復缺尊栄高
貴者並常速過是矣　易豊卦彖曰日中則昃月盈

則缺天地盈虛与時消息而況於人乎況於鬼神乎
史記云日中則移月滿則虧物盛則衰
有為法変とい花厳経曰何等名有為法所謂三
界衆生 気生のうまれ ふしく
うつりうつるを。みな為法変とうつる
。流れゆく水もいやづてかゝ月のいさよひのこゝろ人の世界
▲胡蝶の遊たりあるゝ 荘子うつゝをあくせくせうう
無為小法を
▲高くさい若去のうつくさい間浮の 間浮い屋漆小法を
後捨世を捨く家を出りあるゝ出家をいむうつゝ 野

大和物語云紫ふかうひうひうひうひうひいと
らうあり。おうくて世を捨りのふうんをうる。年
月うくくをつうつうるを。絶交ぐさうぐさに至て。家も
やけうらび。あの異も落られて。いくいくどうら家
うう。うくてたうくぐ。野大郎うての使ふうう行ひく。
いれぐ家の有ーつううを弱く。ひぐなのぬといひうん人
ゑ。いうてあうん。いうくふの行くんく宮へい。世つうふ
行行ーうぐ。仏ゑうん人もいひうう。家れううさわぐふい
ふううふうん。行てうくふて宮ひうう行ふ。うらふうを
うるの。あくめううん。まんうあやうさやうるあよ入

なる。あるひとのたまひしは、ひがさのはしをひらり、ゑをとり
ゐひとく呼ばれど耳にくこそでくるんでつる

「むかしの我黒かりしかの川のみかいらむとなつかるる
とゝゝゝゝうれい。ゑをどりて。ゝゝうりるあこめひとう
さゝめぎてうんやりくるとゝゝ

後撰集云紫白川とふ所ゆくる。大貳為家
真能法師のまうゐつかふ。あたづんゝてゝ為家
ひゆくりうれい。あをりて出くゝゝゆくる。ひがさのうば

「年ゆきかの我黒うゝも白川のみかわらむと老ふるる

今案朱雀院御宇伊与守従五位下為原、紫式部
紫ふかいく類遠をくいうて。村上天皇天暦四年ふかる

ひゝう。大和物語ふうその使。野大納言参議小野好古
を云ふ。後撰集ふい為原、真能ゝゝ。又ひゝうがの集
ふい清原元輔ゝゝ。ゆゑ也。但此、後撰集に
りゝづゝゝく仏ゝ成べ

肥後国の遊君桂姫ゝゝ。又或物云桂姫の龍女い本筑前
国ふゝゝて清ふ。肥後国ゆゑ多り。筑田郡白川の邑ふ住
ゝ。ひがゝがゞ墓白川の邑九品山蓮臺寺ふゆりゝく

「ゝゝい肥後国宮戸ゝ山ふ居住の僧ゝゝい。板も此宮
戸の観世音い灵験利益の仏ゝ

室華山雲岩寺巌殿ハ在肥後国飽田郡本尊ハ観
音也　縁起云此尊像ハ昔自異朝至海上値風難

船師取楫誤融之其像獨無片板至此岸自入岩洞中故曰巖殿亦号山下菴窪心居士此所ハ三年居住し給ふ。本尊の右の方ハ大石あり。窪公の家をかり給ふ

（玄出し給ふの衣乃日もくれハ消ぬ四ん月のもみりふ

此唄の傳ハ此窪公居士を云ふ。肥後国いろ爪ふ住

▲致景　凡京致京にて其所の景を云ふ

▲漫々ハ白髪ふ住を。あの水ハ井筒ふ住を

▲うけ白川乃あらめハ月も待やぬ〜も絶

袋草紙云肥後国の遊景。搖垣老ふ落餌也。白川ハ

伴の所ふあり河也〜　或抄云白河ハ肥後国の河

曽ふ流を出く。阿曽河と云。あそ川曽ふまいうれ

出る。南ハ白川しゐひ。ふい黒川しゐ〜　今案一説

白川ハ筑前国ふ流れ今の宰府の所乃西南にあり。

右の説白川ハ肥後ふあり中ハんく住を。太宰の大貳

の捨地のあるなり家のつゐを取りハ右宰府ふ

ありし時のもの。且又紙友し好古の軍も宰府

まてのもの。八雲ハ松藻抱茂あり白川ハ筑前ふ

住せり。但白川ハ肥後筑前ふ

よハ肥ふ住しのもの

▲文籠鳥ハ雲をとゝひ肉屑ハ友を去の

文粹五云有籠鳥烹雲之思未免轍魚近肆之悲矣

鵾冠世兵曰籠中之鳥空窺不出兵　鶴林玉露曰

拘束以度日月若鳥在籠中兵　杜子詩曰孤鴈不
飲啄飛鳴声念羣誰憐一片影相失万里雲兵

▲貧家よハ親ゝ疎くなり賤しきよハ故人うとし
文粹茅一橘在列秋夜感懐長篇曰家貧親知少身
賤故人疎兵　寒山詩曰富貴疎親聚祇為多錢宋
貧賤骨離散関兄弟少兵

▲老衰へくらもうく衆小似うり
老摧及衆衆ハ都婆小町小説。露命ハ金剛
般若経曰如露亦如電兵　史記曰李陵曰人生如
朝露何久自苦如此兵

▲値遇をたゝぶ足引の山下菴ハ小茅屋なり
値遇ハ盛久よ説。山下菴ハ茅屋を云上よ紀
足引といふとい古ん拾遺　古今真名抄云伊奘諾
伊奘並尊国作り給ひ多よ。此ゝよ葦のこと葦とう
よよて。日なを葦原中津国しうく。ゆるを二柱の神
葦を引捨手地とうり給ふ。其所葦積くゆく成依
葦鬼ふとしこゝく　万葉仮名抄云有抄云ふを
足引とこふ足を、一ふハ三方の沙弥ゲ亟月小ふを詔
なるふ。大きよ葦くゆを多ひなるは。ありひなの山路
もちうゆちうりの枝もたりふ。ものゆくなり。保
しられい。是を引なるなるふ。ひなしこゝく。二よい推古
天皇ふ入く持去ひふ小。仲足小杭を踏ゝそる

ものゝ引ぎはひなるふるまひ。ふを足にて云ふ。三ついふ天一望ふ一角仙人と云ふ。あるいはふるまひて。足をもたるふるまひあるのふ。智安衛十七ふ足をもうゆやはいを天地さけ分をく。日本の土泥いまとさまをうるる時ふ人落ふよあり。ふふりのかりるは。足を引なに似ることば。足引と云ふ。此等の義共ハいまよさば。ふをあしびきと云ふ。やしふい。ふるさ義。ものふいまふふる義圓と云河と。移るよふ麓と云い雑ふ嶺へふる事。此ハ昔紫の方に多ふ。万葉第七の歌ふ。あしひきの峰へ一ふ。ゆりの一丹の色まあり。ふいふく。ふをいひ山と云る風

河ふ河ひきと動ふと。あしびと云本なれば。あしひきと云ふ。ふいふ楊を楊本。柳をういハ本と云ふこと。

弱きい心麓と出て。ものゝ作るも此義と大家仲大伴卿歌ふ

妹とふ吾心麓ハ本ふ。ふげくめ

◆後撰集の歌ふ　拾芥抄云後撰集二十巻。歌数千四百六首。或千三百五十六首。天暦五年辛亥十月於梨壺以藏人少将伊尹為和歌所。別當能宣元輔順時文望城等撰之矣　袋草子ふ歌千二百九十六首と。　家歌合ふ。その古今につぬ歌を。昔のも今のも出せ。

く。後ふ撰ぜらるる撰集と云名を付さるひて
とうく
古今集抄云後撰集は拾遺の集と。をもへは万
葉集古人うたくいあつめたる人まれなるをいく。後撰し
ふい古人うたのちの名をあつめたる。万葉のは
撰と可云得所い順ふ作せく万葉を後の世
めしうつる万葉のうた後を世とをく。古作を
なとせうされい後撰い河のうたのみしぬ多
し。ふいたりも拾ふよ作るとしうく
此集ふい序なし

△年をへい我黒髪も白のうへいかむまく老よ多ふ

後撰集雑の之よへ。ひげさの媼ゲ答。河出上ふ紀を
この多大和物語ふいむうたを玉乃緒黒うをいを白川のと
を。又檜垣家集ふい。老ををうらのうをいを泉
乃。うへわうむまくをうふ名をを。うへいうむ
とい。うへいさたをふを。老て孫乃ゆうをを云
をを白うをのうへうむうふをうををへてをあり。如しと
うへわとい老女をを云。
日本紀云因象因象女水神也伊弉冊尊所生神也兵
髮白老嫗の体也。　玄旨云一説云年をうぬをい。腰
ゆくをう。せうをう。二の膝とうをうを中ふ。うらをすい
ゆく。之の御をくをうをうをとくく。　童蒙抄ふ文歌云

◆昔筑前の太宰府小庵より柵垣をつゝひく經しの物

筑前筑後二ケ国を筑紫と号を柳川小治

大和本紀云崇神天皇東国征罰の時紀伊国より伊

勢を押出して筑紫の地を指く溝渡と指ふ中略

雖凡俄小吹発く。これ勢を強小吹分筑を以て右押

出し。溝渡名小。又竜田乾小吹発く。仍て前よれ勢分

名処を筑前と号を。後小分名を筑後と云。

つくちく同じ。つくしとは一韻名故しく

太宰府へ行道の途小ある。都督府也。又西の都也い

へり。太宰府の跡へ。四府村の東。観音寺村の西小

つきゝ云小ゝ名。其西の田乃中小ある。大さ名

建家く物也。其小ゝ都府樓の跡名。南小大門の

跡ある。　職原注云太宰府帯筑前国聖武天皇天

平十五年始置鎮西府先是有太宰府号兵

又曰昔筑前国置太宰府筑紫是辺要而兵事賊徒

多或異朝境界而藩屏地也故置府以防非常兵

柵垣ハ大くさくれる垣小いあるく。柵板をくの為ふ

物しるくさくれへふ也ひ。ある宿のとゝろの中柵垣あのくさくやいるさ信實

。ある宿のとゝろの中柵垣あのくさくやいるさ信實

としある神成へ。白柵よハ仏原小治

私云家に柵垣の嫗を白穂とゝ。ゝ。ゝ治

物よハ名物治の仏附ゝ。ゝ柵垣ゝ時ゝよハ白穂

といつる名ゑ時代おもはせり

▲藤原乃真範通ゑ時　三代実録云仁和三年八月廿二日掃部頭従五位下藤原真範為筑前守文略大系圖云真範宇合五代孫因幡守正世子弾正大弼正四位下参議太宰少貳　矣

▲風収緑野煙條直。雲定岩頭月桂圓

此詩作者未考詩の公明ゑ

▲朝小有紅顔世路小ゑ暮為白骨朽郊原

和漢朗詠集云義孝少将詩云朝有紅顔跨世路暮為白骨朽郊原　矣

此詩毎常の意をいはゑり。上句紅顔ハ若時ゑりゑ顔ゑ。下句郊原ハ文選注曰野外ゑ

日郊　矣　或人云是ハ冷泉院の御時。麗景殿女御中務の時。義孝少将の他界ゑる孔文ゑゑ

▲有為のゑ花を夢のゑし　公明ゑ

▲老少ゑ云ハ分別ゑゑゑを以く朝ゑしゑ

老少の姿のゑゑハ実の浮ゑの朝ゑハ他ゑ。有為の同の時義の歌ゑ。民死ゑる処をゑゑの朝ゑゑゑゑゑ

慶韻曰期限也要也　矣

期　矣

▲洞曇ゑの魚ゑゑハ　洞ゑゑゑゑる顔ゑ

新撰古　○有一夜の石新ゑる月小ゑ洞ゑゑて在ゑゑゑゑ　源教之

▲今ゑ執人のゑをゑゑ恫廻の姿ゑ浮ゑゑ

経ゐも嗔恚を火ふかくして愛欲の犯しを水ふかくする
多くなり。 楞厳曰情積不休能生愛水 兵
東坡句ふも変河水と為る。悔過ハ實盛ふ涙を

▲今もなほ三瀬川を三瀬川とハ 苦しを尋ねつけよ。三瀬
川ハ三津河と。葬頭河共云。 十王経曰前大河ハ
是葬頭見渡亡人名奈河津所渡有三一山水瀬二
江深渕三有橋渡官前有大樹名衣領樹影住二鬼
一名奪衣婆二名懸衣翁 兵 是三津川の翁婆と。
衣をもぎ樹ふうなづく云是也。 海法花陀羅尼曰
亡者往黄泉之道其間有河名三津河 兵
山家。ねつ川やなりてそ三瀬川人をもかもしるらしかん

▲熱鐵の桶を前ひ猛火乃鑊をさげくはへをもむ。その水
陽〻成て我身をやくるの涙もなれも
ひぐちなのれい衆をもなる拉女なるゆゑ
講式云先言地獄者鉄城周帀熱鉄為地猛火洞然 六道
四面充塞乃至雖求冷然水鑊湯沸而溺身 兵

▲殘星鼎汲北溪水後夜爐焼南嶺柴
是い誰の句ぞ未考。ひい四物ふ尽くしう畧之
鼎説文曰鼎三足兩耳和五味之宝器也昔禹收九
牧之金鑄鼎荊山之下 下畧

▲氷ハ水より出て水よりも寒く。青き蓼より
おて藍より深し 荀子勧学篇曰君子曰学不可以

止青出之藍而青於藍氷水為之而寒於水註喩学者
則才過其本性矣　史記三王世家曰傳曰青采出
於藍而質青於藍者教使然也矣　意ハもとゝ色ハ
藍なりなれども光・藍なりなれども染てまし・学問油断な
く勤むべき・才本性ふるゝ・才ハ本性ふるゝ・才ハ師匠ふるまなへ
しなし・元ひとしきのれい若くゝ浦さ遊女の身ふりなく・
又罪ふ沉こゝろをもるといふをとり・
水を沈めるの心も密なるゝ
○いう平沈のんも密なるゝ
○ゝるゝくゝ藍なりあくあいなりもるふ浦なこの色なる弘資
▲いや増りぬるゝひの色・紅井の泪ふ身をこゝ
ひのひのゝをとふ
紅の泪ハ血の泪をこゝ・袖中抄云つゝ流ぬるゝ・泪つ
ゝをゝ・次ふ血を流をゝ　開元遺事云楊貴妃
初羨恩召時与父母相別泣涙登車天寒涙結為紅
氷　文畧　大和物語云源氏帝の御時良かねと云
人・世を捨くゝ法師ふなりくゝ・泊瀬寺ふ行
ふ・かねの妻も参ゝ後して二人参てく・秋一夜嘆
ゆりて・おろ勢ふ尼ゝ・蓑も笠も涙のゝ
ゝ延い・血の泪ゝくゝ
の涙ゝ云ものいあるゝ
礼記曰子皐執親之喪血泣三年矣　韓非子曰卞
和乃抱其璞而哭於楚山之下三日三夜涙尽而継

之以血兵

新勅○紅の淵小柳をせきうゝてうゝ花ちひのゝふかめる　後法性寺

▲紅花の春の雨紅葉の秋の夕ぐれも　江に小柳

▲翡翠のうゝ花ちるまき桂の屑も　卒都婆小町小野

▲清奥のゝふの細布　身あいて　静御前

▲紅ゝろ白梅の甚　俤の有へさ

世をへさいはゝてゝ　ゝのてゝ　ゝ　ゝ　ゝ

あるはいかゝれを　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝの　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

▲芦田鶴　屋鳴小野

阿佛鈔云あゝむゝしゝと云ゝ　ゝ乃迦ゝ　ゝ

ゝふあゝむゝしゝ云ゝ　ゝ人の　ゝ　ゝ　ゝ

そのゝゝゝ人のゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ

つゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

てゝその　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝゝ月　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

〽あし世なる月卿雲客宮中におゐてむすびふみを
かやうに文字一二の間ゆく程、みなにかせられ、又小町おもひおもし
ろくく詠、大内を出られしが、ふに見ありけるに大内の女房たち
ちらしく、小町がもとへおりしとなり、又それよりはいろ〳〵とあやまく
いひかはしてひたりが、ある女房のいひ給ふ事には、歌をよ
まんともしかるを見給へ、小町なりしは恋歌をよくし
いひたれば、歌をよまれけるに
「そもの歌乃有しすゑにおもて給ひし此玉簾の内やゆかしき
小町ハむかし大内よりもまめ〳〵しきまかせのうちとハすむ
玉の内のあるも、此歌なりよ
「そもの歌の有しすゑにおもて給ひし此玉簾の内でゆかしき

かやうに詠るハいかなるおもむきなりと　已上
寝覚(ネザメ)記云中納言重能(シゲヨシ)配所よりゆりて内へ参り
給ふ時、局(米子)よりしけるを女房たち見給ひて
「雲の上ハ有し昔にかはらねど見し玉すだれの内やゆかしき
とよみてさしいれけるを、重能見給ひ、おもしろくおもひ
よりは小松の大臣(ヲトヾ)へ参り給ひしに、返しに及ばぬぞとて
此の哥乃かへりあげれたる所、やの字をけちて、
ぞとき字をかきて小女房にくだし返り給ひし
となん　已上文畧
私云小町あふむ返しの歌ハ阿
仏が小町を、此ノ説は重能でのあふむ返しの歌を小
町が歌にかりたり。説の作者何仏がをもつてかくるさ

る所、俗にうつ異なるとくたんい等し

▲是は陽成院より終まる新大納言行家卿

帝王編年記五十七代陽成天皇諱貞明清和天皇

太子母皇太后藤高子号二条后贈太政大臣正一

位長良二女貞観十年戊子十二月十六日乙亥誕

生於染殿院十一年己丑二月一日立太子二歳十

八年丙申十一月廿九日受禅十九年丁酉正月三

日即位豊樂殿御年十御宇八年都平安宮天暦三

年己酉九月十日庚戌出家同廿九日崩御年八十

一奉移圓覚寺矣　新大納言行家ハ系圖志考へ

彩の字を宮の訳ふ歟大納言ハ宰相

其宮の中乃下鶴とそし。なくハ大納言今世十人。甚

ふ庭を彩大納言ハ　大納言の夏ハ大原に住ふ記

▲扨も我去敷浦の乃ふれ人を歟

我去しい陽成院をそし。敷浦の乃ハ和歌の乃ふ歟

▲哀やく。ふと撰せ。是ハ叡慮ふ

陽成帝の代ハい。和歌撰集の法を為る号

▲哀より出ハ。ふ小野良実ハ歌より小町の小町

小野良実ハ系図及と小町ハ卒塔婆小町ふ法と。出

羽ふい蔦城ふ法と

▲上ハ葵上ふ法と。関寺ハ実ち小町ハ紀と

▲今ハ石子の歌とうて　世ふ小町を石子世の歌と

云ふ也。小町は六十九歳にて死すといふ。
業ぞうは小町を百とせて云ふは。伊勢物語は。百とせ
ふるとも。ことばつくもがみとあるは。小町業平を
意ずる時。業平のまねをして。後に小町を百とせ
の姥といふ成へし。要らうたてしかは小野小況を。
◆甚迂闊ふうと立て歌を下はへさるの宣名小況せ
けるは。此の物語を考へく見るべし　或云藻璧門院
中宮女房は近江ほあふこと云ふ尼ふりて居さ
ふ。禁中にて七夕衣と云歌を下されは。
新拾　秋ことそも多年油のせいにれい七夕つめは行とさは
ふ
ふるとふ小町は小野小況を見る也

韻會云題名也品也一云題也江陵歌題彼泰山矣
多の歌ふうる歌。文字歌とうるを。うる歌とい羽云
をるうつけく。見を歌とうるこ。文字歌と云い。
ふくは多宜。意。慶間義。此多を文字歌と云。或は
むとひ歌と云こ。ある小むしはいうる歌年ゆく文
字歌ず。文字歌は凡ッ後成宣家なる家。三あるう
ちにうるこ

◆我は流をの松坂々は宮河原は宮河原は宮の辺
るうん　は宮ふは宮の辺とうるまさ六のうるうと
久ふ流と。六のちまさい六のうるうと
玉ふ　六のうは宮のちまさの若をうるかうて明るうく。さ後十八

▲昔ハ芙蓉のなとゝ分るまゝ九今ハ藜藿のごとし

玉造云暐曄面子疑芙蓉之浮曉浪兵　冷斎夜話云
李太白詩曰昔作芙蓉花今為斷腸草以色事他人
能得幾時好兵　格物叢話曰芙容之名二出於水
者謂之草芙蓉出於陸者謂之木芙蓉兵
説文曰芙蓉荷華木芙蓉秋花兵
藜藿ハ大原作ホ注也

▲顔ぐせい憔悴とおとろく　玉造云容貌傾頽兵
屈平漁父曰顔色憔悴形容枯槁兵
韻會云憔悴憂患也或作顦顇兵

▲肌ハ凍梨のごとく

以上小野ノ老衰ちゝ

とゝ。　玉造云頭如霜蓬腐似凍梨兵
郭璞方言注曰梨面色似凍梨兵　韻會云梨果名
又老也兵　爾雅曰耆面凍梨色似浮垢兵
註疏云凍梨老色也兵　私云注疏の云ハ凍梨と
つけとゝハ老人の膚乃色のゆゑと云ゑと。色
顔く梨肌ふるを云ゝ　凍梨のゆゑと云河東雲
言ゆゑ也とも古来あらの説多し若菜上云不定
のさゝめるさとゝ　抱朴子云本草云芙蓉乃仙
乃仙程のまくなるとゝ　長明海記云民烟乃
りゆりハ父喜公神の恩火ゝゝ
古今業雅抄云法験のゆゑ

かやうのたぐひをとりまぜて凍梨のすとつけるも
苦しうゝぬる
▲さとくい捨ぬ命の為ふるひて　或人見いたすこと
いとゞ下句おうさもひのうゝめ〜さるに長るゝ歌〜
▲面白よつくもうゝ　卒塔婆小町小野
▲かゝらさうせいうゝ〜　後拾遺集小懐法師正脈
云をとゝある
月ゝ夜ふ流の歌乃つゝされうらさうせいうらさうせいやい
▲寒く関寺いさすうふ歌を〜て寒ふいあ白ゝさ有ゝ
文選有閑居賦李善註曰不知世事閑静居坐之意
也矣文中周公云子謂賈瓊王孝逸凌敬曰諸生何
樂瓊曰樂閑居子曰静以思道可矣
さゝそゞい安達原ふ流を面白い之情ふ流を
▲前よい牛馬の通路ゝく　関寺い安達原の寒乃ふ右
の方ふあゝ大津の駅路ゝ依く牛ゝの通路ゝ
▲後よい実験のゝ言ゝ〜て　之井寺を指く云ゝ
▲松風もふゝひ
家の数かゝゝ花のさく流水ゝ〜せく松風白ふ云ゝの幸婆　實隆
▲ゝの幸婆乃一松い之井寺ふ流を石ゝの級世音瀬田の長
橋ハ田村ふ流を
▲ゝ云ゝ波ハ涙乃寒当ふゆゝひ
涙をせゝさゝゝゝる袖ふく涙の寒ゝるゝい

つけゝり。名家の宮に洞とむすぶ古き名なし　略之

▲我いにしへハ百家仙洞乃まじハりをなし時とも

小町盛なりし時ハ。高位に交る事多し。小町殿上の
交りせしことハ後撰の物にも見えしぞ

百家とハ百官諸家を云也　百寮訓要抄云百官
と云ハ天子よりはじめて内外の諸官也。必ス一臣の員
数かぎりハあらされ共。百寮の役ハよくハ申なり。文々
百ハ数の多きを云也　仙洞ハ院の御所也

葵ノ上に見えて

▲今ハ花落穂に出てめく　関寺小町に見えて

▲雲の上ハ有し昔にかはらねど見し玉だれのうちやゆかしき

此歌ハ陽成院より大内の女房。重能にかはりておくられし
を。重能やの字をけちて。ぞと云文字をかきて返歌
おくられし。此歌ハ内々遊ばされし。其を此ノ孫
帝の此歌になり。叔小町返歌おもしろし。御
佛前に小町がおもひしの。歌より。上小紀を

▲ちらしやるなき流をくんで水上をたづねけれど
小町。衣通姫乃流をくんで。和歌の源をたづね来るを
もつて。の歌ハしきしまのみちをさかへしとし

止観一云挹流尋源聞香討根　矣

▲貴かりし位に交りしと云事只和歌乃徳とぞ
にしの白女ハ弘仁帝に召され。源ノ左衛門へ嫁

ゝる時、別を惜(ヲシミ)くゝまゝる哥。古今和哥集ゝ入。肥後
玉ひゞゝのゆ(ユ)ゝ入。後ゝ野好(ヨシ)古ゝ入。
の哥をゝゝ。後撰集ゝ入。神祭の宮ゝ入。拾遺
集をゝゝ。墓(アヲハカ)の傀儡(クヲイラヲイ)名、曳ゝ詞花集をゝ。
江の妙(メウ)ゝ彩古人の絶者ゝ。其外あゝの哥ゝ
續(ゾウ)ゝ哥ゝ哥をゝ。みて。後の撰集ゝ入る。古今(コキン)
その例多し

▲長歌短哥　長歌ゝ短哥ゝ古ゝ入ゝ多し。長
哥をゝ短哥ゝ又(マタ)三十一字を短哥ゝ。
詞林采葉云東三条入道大臣家融院(トヰノ)ゝ。
長ゝゝ長ゝ哥ゝ。短ゝゝ短哥ゝ作ゝ。

又五条三品、京極黄門共ゝ長を長哥。短を短哥
分明ゝ被(ルレ)注置(ヲキ)ゝ　古人ゝ采雅抄云物の五七ゝの
ゝ。七五七ゝゝ。ゝゝもつゝゝて。ゝ結句ゝ七ゝゝ
ゝゝ始終ゝゝゝ。普通(フツウ)の三十一字の哥。ゝみ
つゝゝゝゝ。又(マタ)長哥ゝ。句五七ゝ七ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
私云長哥短哥の法ゝ家ゝの法ゝゝゝ墨(ス)之

▲旋頭(センドウ)哥　古今ゝ注抄云旋頭哥ハ文字のゝゝゝゝ
めゝゝゝゝ。又ゝゝめゝゝゝゝゝゝ
字乃哥ゝ一句あゝ
かゝゝゝゝゝゝ

萩の花尾花くさ〻を花ばなの色女郎女郎花ちるを見の心

▲折句　基俊口傳抄云折句山上憶良

らふ雪くもむ雲ゝ小町が人よ恋うる雲ゝ雲雲

こゝの雲ふもとゝ云うるをいだのまゝんでつゝみようしでハ

ちるを

ことの葉ゝとゝ

▲諧謔　某雅抄云諧謔ハ

やまのゆゝ世間よいあをるれるゆゝをゝとゝ

へゝ。此ノ集のゝ文ふちつゝを。ゝ。

とゝあるを俳諧と云ゝ

躬恒秘花抄云俳諧と云ハ和歌ゝ

桐火桶云古今の諧謔ハ相傳の人ゝ〻〻ゝ。云ハ

はれ堂殿問ひ給ひしゝども秘しゝゝて

答へゝさんるゝとゝ。古今のゝ世ゝ人毎ゝ

ゝ俳諧と云ハ歌ゝを云ゝ

ゝ。和歌乃物ゝを云ゝ

ゝ。和をあさむくゝ

ゝ。ゝ

秘ゝゝゝ　慈鎮和尚古今集注云諧謔有九

種名一俳階二諧謔三俳諧四滑稽五諧謔六謎字

七空戯八酬答九俳言兵

▲混本哥　基俊口傳抄云混本哥ハ三十一字の文句の

内。一句をぐくとを云也。こゝ　云仁抄云混本ハ旋頭歌
の吳名くゝ　童蒙抄云混本分ハ紀氏大納言抄
よ。後撰(コウセン)の歌ふぞ入る。いとぞそこ出るが加ふ。
文字乃數をゝめを。ほふ毋くゝめよあべしょうこく
　　安部清行
　　鶯の名ぐげをこぞ敎やそさなの世でうゝ
▲あふむ也ゝ　　玄旨図書云鸚鵡(アウム)くゝの中。此音の人
まゝをとるやうふ。同ゝ須を多く也分とるうを
云こゝ　童蒙抄云あふむ也ゝといふ本分ふ以る
ふを。こゝざまるゝで。こゝうを云つさこ。也ゝ必
さもるさが也ゝこゝ　基後抄云うけ分乃須を
ぶく。同ゝさまゆく也分とるを云こ。後一条ノ
院の素日(カヤカ)ゆ者よ。上東門院ゆ啓ゆゝを云こ。法
成寺入道よみ法ふ分ふ
　　そ乃ぬを(イ)ゆを毋ゆん素日地の同ゝ乃ゆを多ゆ
上東門院のれ也ゝる
　　同ゝ云ゆさ世のそうゆる素日の同ゝ乃ゆを多ゆん
▲週文(ヨウブンカ)ゆう　　基後抄云週文ハとうゆみ下ゝこゝを。
下ゝうゝこゝゝ同ゝ分こゝ
　　ゆ毋ゆ法ゆふ以ゆゝ素ハ毋先(イ)後ふゆゝもゆゝを
▲唐土ふひとゆのゆるゆうこゝ分をあふむ也ゝ
本草綱目云鸚鵡(ハ)如嬰兒之学(フ)毋語(ヲ)故字從(フ)嬰毋(ハ)大(ル)
者為(ス)鸚鵡(ハ)小(キ)者為(ス)鸚哥(カト)矣　　説文曰鸚鵡能言鳥也(カ)
　　矣

前武紀曰南越獻能言鳥師古曰今鸚鵡籠西南海
有之一種白一種青一種五色矣　山海経曰黄山
及數歴山有鳥名鸚鵡矣　爾雅曰鸚鵡青羽赤喙
如鵶郭璞云舌似小兒有五色者白者赤者凡鳥四
指三指向前一向後此鳥兩指向後矣

▲ゑのさまさうえんあうるゆく　関寺小町小歌

▲ゑくの書典ゆも記しゑ侍へと

璿璣鈐云書者如也寫其言如其意矣　釈名曰書
庶也以紀庶物矣　説文曰典五帝之書也矣
爾雅曰典經也法也矣

ゑふうふい・ゑくのつゑとゑんるまハ・ゑ侍へさゑ

▲和歌の六義を弟子ゆを　古今序云作ゑさま
六つあり・唐の ゑゆをうくてるつさ・そのむくさのひ
らゆよい・そへうさ・大さ・ゑの作門をそへさて
まゆ出る ゑ　風

「新撰津小咲ゑこの紀をうり今ハ去て咲ゑこのむ
ゆ侍ふつさ侍へゆを・つさ侍へとをめをり ゑ
をゑゆとしてをすして・ゑ侍ゆすめをゆ出ゆ
ゑくゑ云・添の字をゑ侍へをを・ゆとい如ゆ・ゆハゑ侍
ゑ・ゑをゑゆる水・ゑさ小ゆうして侍を歌をゆ
ゆを侍へゑと云・ゑ乃歌を頭小ゆうをすを

鸚鵡小町

まそをるあはふさふるをもてこうふ
ふてはいはるをへ字 賦

「咲ふ花ひつくるのあちさるく分ふてうつきのるも
花いんをおい宮て性ふもこうる。数ある和を性ふ
かをへ字るる祇と。賦の字いつくをもむ。つくをい
数のさいるる筆と。此字乃ん咲花ふ花ひつきて
かさうるく散をうるを。咲を落るをてをもう又
るれをと。いさつきい若ると。此の字を去いるしい者
くと。此字い拾遺和名ふつぐをもめる大体墨を
をへはるをもをへ字 北

天ふるあるこの哉のあをているい高さ毎ふをへや
是ハ一切の和ふるをへてをと。哉を我身ふるをく
るあをているををいい(ア)。法の字いるるふをもむ。
るるるをるをを二川るをくくあるるを
真

「我点いるむ光つをあるて海の涙乃点砂いををつく花
点を涙の点砂ふをへるく。おをく時いをしめの
をへ字ふ似るをうるを。是ハたをへ和をををを
を出ををへをうをしめのをへ字ハふふるるを
いををして外をうふるををてをるる。真の字ハ
だをふをもむ
いつをはたをて字 雅

〔俗のうさ世なりせハいつの中人の言乃葉時うつり
そこなる風情もなく兵乃りのうさ和とありのとく小
まなるべかもいつりうさうさされいうこそ云
雅の字ハまことくまあり・第二のうそ人乃小似るなり
なるとちつひさう・うそ人乃いてふくもひくあり
ひつよハいちひ字 須
〔このものハむへもうさうさなるの三そ四乃ふるらの つくるなり
万乃なるよかめ恨ひうさうさ乃うそ・俗くいそひ乃しこ云
須の字ハむうしこ・乃のふいむへハ比ひこ云
なるこ・とみハ葉へうとこ・うさうさ葉いひの本こ・さい
ちひ和のしこ云こ・世累しこくさうさ葉しこうこ・但世
をいさうとしへい・さうさ葉へうふ・ひぐさひこ
なるをい・さうさ葉しこうこ・こだ比ちいちの字と多
さうふつうふこ 已上基俊抄

古今序小唐の分小もうくで有へうこいハ詩の六義をこ
詩經大序曰詩有六義焉一曰風二曰賦三曰比四
曰興五曰雅六曰頌中畧一国之事繫一人之本謂
之風言天下之事形四方之風謂之雅雅者正也言
王政之所由興廢也政有小大故有小雅焉有大雅
焉頌者美盛德之形容以其成功告於神明者也是
謂四始詩之至也矣 大全註曰賦者直陳其事如葛
覃卷耳之類是也比者以彼況此如螽斯緣衣之類

是也與者託物興詞如閨雎鬼罝之類是也矣

▲小町かおもを払ふこと、君乃ためしにひくのこう

小町が君をたのむこと、君のためしとなる未勘へ

基俊抄にたてこそ、君は、已ぞるおもてあをひりの先

にあめとあるは、小町が君乃待もなつまあたく

ことこそいふあれ

▲よそほひの花とつくらまを　小町が容儀をかめくる

詞く、よそほひは物欲に餘條と云

又餘情とよく可読也。花は様美の詞く

▲桃花面をあひ柳鬢風にたとへたり

玉造云桃顔露咲柳髪風梳矣　万葉集云閨柳

葉於眉中発桃花於頬上

▲紫笋作らびきかなり　紫笋とは笋の如くさきか

るをいふ

紫笋蒋営各闘新矣　白氏文集二十四云青娥遞舞應争妙

同二十六云紫笋折新蘆矣

▲梨花は名のとほりしと　美人を梨花になぞふ

るは楊貴妃に源を

▲今顦顇となりたまへまんてへひるゝ川より小町をはなる

顦顇は上に記を　あんてひしも川は物欲よ心底悲

悴とかけり　玉造云容顔顦顇身躰疲痩矣

▲如何小小町業平玉津嶋かくの法楽乃為をかるひと

此業平の後文つかふべしなを　業平は在五にて候へ

玉津島ハ歌枕ニ小記ス

▲稲荷山　新政小記ス

▲葛葉の里も浦もく

他ニ若の浦をいふをこゝ。葛葉の里ハ河内ニ

交野郡ニ　日本紀第五崇神天皇卷曰彦国葺射

垣安彦中胸而殺其軍衆怖走屎漏干褌乃褌屎処

曰屎褌今謂樟葉訛也　文畧

▲和歌浦　和歌浦ハ同じつゝき

南紀云弱の浦ハ紀州海部郡府城の南一里計小

あり。弱或ハ作ル和歌若ニ海濱ニ松林あり。是ハ中

古植也。古歌ニ弱の松原小此也。土人いふ弱ハ宮

山の麓弱村の中ニ。古人松原ありゆゑ。昔寺ゐ

芦毛寺と云。土俗相傳弱村の北二町計田畷の中

ニ小丘あり。是其寺の趾ゝゝ　次ニ上の濱

ハ同府城西南弱の浦乃少ニ小ニ。松原あり。田畷

あり。人家多し。其間ニ散在ス。昔祠あり。次ニ上一

乃祠と云。今殘る小社なり。趾も土人知者なし。

按ニ是ハ宮戸村の少し矣大明神と云あり。若ハ大社の

也。是ニ次ニ上の祠なるべし

▲忍摺木賊　忍の摺衣ニ大紋の袴のごとゝ

伊勢物語小葉子ニ云のふしもりの摺衣をなんきる

なるべし。和語の説ハ。葉子の摺衣。忍草のごとく

まくらわるゝ　此ノ謡の狩衣ハ赤地の小紋を本織色
にてもられるなへし。
太紋の袴ハ奴袴にハ歳の大紋あるを。大紋の袴と
云。四十より以上ハ浅黄。四十より以下ハ紫之。これ
大略也　赤の小もりのする小袖に添て。狩衣ハ松
風よ混を。朱賦色の指衣ハ白き梅花に添て
◆風折烏帽子ハ辛執波ぬ小町よ添て。波ろへてハ柳の枝
◆若の浦に絶えらしまハうさをなこの声色をさしく
田鶴鳴わたる　万葉ふ山赤人の哥也。うたをなこハ
浪に帆を。浮なさく。無乃字也。あまく松風ふ添て
此謡にかくをなこのしらふる赤人の御名に
そむる。唄の作者何と心得ての、字を一字つくろはる
ぞ。おそるへしつゝしむへし
◆月にハめでしまそやはつれハ人の老となる物を
伊勢物語云　昔いとまのことにハあらねとこれうち友ろ
花あ川まりて月をもあてゝみれハ中ふひとり
「大方ハ月をもめでしまそやはつれハ人の老となるもの
此ノ哥古今雑ノ上ニ業平ノ哥也。哥の心ハ何事も
下物に貪著しく一身を忘てんのかごとくの流も
まいれ。老となる処をわひくしく。大方ハ月をもめで
ドとわひとりる也
慈山云同書云大かたハ十の物。七ツ八ツのんくまく

行小早き之の法乃時人をまつ事なくひとくハ
古語云光陰可惜時不待人矣　陶渕明雑詩云盛
年不重来一日難再晨及時當勉励歳月不待人矣

百人一首抜書の内に有
小野小町古今集に載せ侍る云出羽郡司女
作者郡司義房　古今抄不同之　御抄云出羽郡司小野良実
亦者澄女　三光院説云澄女　郡司ト八國司ニ次ク官人也
有如ノ大國ニハ郡ニ大領小領主帳主政ト云アルヲ郡司ト
袖中抄云十巻五帝ノ時好物ヲ作ル故ニ
号ニ絹　三光院説云吾宇庵ニ云小野ハ
あ[illegible]

卒都婆小町

拾芥抄云小野小町出羽国郡司女或仁明天皇御
時承和比人矣　玄旨法印百人一首抄云小野良
実女又常澄矣　三光院御説云當澄女矣
古今巻雅抄云小町ガ事ヲ明ラメタル。仁明承和ノ比
乃人ナリ。出羽郡司ガ女好色ニ双ノヨトシ。老ヒテハ
流俗ニシタガヒ奥ヲ尽シテ死去セルヨトシ。
筆抄云小野小町ハ好実ガ女ニ。好実大和守ヲ
上洛シ給ヒ時。近江国玉造の辺ニテ独の小女ヨリ
則ち問ヒ給フ
私云玉造ト云ヒ事ハ書ヨ。大師ト小町トノ問答之ニ
えいるひ[illegible]

大師の御作にて、此御像、玉造を初め諸所に多し。此御像よりて、
仏親の御作にて、都婆の事、此玉造より起る。此御像よりて、
腸を掛けると作る故、小町とい名付る。
又云大師と小町とい時代同じ。曉覺抄云弘
法入定い嘉和二年。甚、此小町ハ三代実録成へしと云
今案弘法入定い仁明天皇の代。嘉和二年三月廿一
日。小町が歌ハ後の勅撰に入る。
多くの人を過て
多くの門合ハれい。時代おそ過せり。
後撰集云
おもひのくるさまいと玉造と云文を尽せり。此文清少
ぶかくかくし云沒わるべし。高野大師の御作の目録に入
まうしまうし 同抄抄に此玉造の事。今世言葉に

ぬる。御作ハ、御作の目録に入ぬ。玉傳源秘抄云小
野小町ハ。小町ハ大師御入定の時い御年四十。爰に大師
御作の玉造と云小文。小町衰老の事尽せり。此文
如何答云。此ハ大師御作の目録の書の中に入ぬ。現在記未記
と云ふ。今此玉造い未記の中に入ぬ。彼れい小町
が歌の事を考へ又彼へる。又云仁海僧正の作共云。
然共大師の未記に入る事勿論也。実録に此書大
師の御作也。其故ハ仁海の云ふ事に大師尽く書記て
を、仁海作り彼へる。 通念集云玉造の歌の事
一説に云、宰昌云。宰昌ハ性空聖人の弟子小大師御製
作の目録九十二番目小野とそられたるなり。

昌三又同云大師と小町との時代おなじ。大師い素
和のちゝめるようにれ給へり。小町う盛りなるゆゑなの
るべし。そゝ流めるいとりしとしなるい。改筆をて日されい
小町美女のちゝめるうを人相をもくちう老衰の。
素くゆくいるんと考へ給ふ。一説のるに意
のあるにあるゆゑとも美を作をてるんてしかるとし一説
享徳三年甲戌孟夏十日南都東大寺摠持院玉造
之奥書云右玉造者高祖大師御製作也云々
玉造の多い大師の作製ようこうひるさるのるの。
作者郭鄰云玉造云小町那人事云
按ずるに彼玉造の文より倶家之ごとしあるを見れい
まゝの小町と。玉造の小町と別人共尽こう。不代
玉造小町るゆ。玉達の異義ちくまて一決ずるべ。
依て流紀まる小野小町るゆきいめくるうゆ
いひ。業雅抄ふも小町るゆ。ふ沿るる実
ちているるんう

和音
▲ふいあさふ漁家の源ちゝんるるん

一休和尚山居世八ノ六
同世中ノ人ノ場
ちゝるゆ見明ちゝて

ふいあさふ漁家の源ちゝんるるん
文選五云王康琚反招隱詩小隱隱陵藪大隱隱朝
市二矣　白居易歌云大隱住朝市小隱入丘樊々々
太冷落朝市太囂喧不如作中隱々々作留司官矣
乃を志ゝ者いあを市朝の源ゆ棲ーーゆゝを

山林の中より止め通るべし必しも山谷深きを尋ふ
地を選ぶ其の心意を修むるなり
後水尾院御製
○ふかい入の奥のかくれ住とはいふし深くとも
月
○おのふるさと市ふるあハ住山の霞まさりくんあるを
後拾
○世をいとふ山いおりもるあくしゆるるを山のあくるもたえ
上人聖僧 仏法僧三昧依

▲見いる野山より出る僧
此僧い弘法大師と尋るへし ▲我ばかりはとそ

弘法大師姓佐伯氏讃州多度郡人父田公母阿刀
氏夢梵僧入懐而有妊在胎十二月生宝亀五年十
八就沙門勤操落髪受泌弥戒初名教海後自改
如空延暦十四年登東大寺壇受具足戒又改空海
同二十三年五月入唐中略 暑干時兼和二年三月廿
一日寅時寂年六十三元亨釈書 文暑
高野山八紀州伊都郡也号金剛峯寺弘仁七年丙
申六月空海初開高野山矣 仏教不のめりよ猶
抽山 楊柳山 摩尼山 そこ山のこかる
へのごとくよりたる野山 此三のこかる
但し和よる野山 云い無名とんはへ
もといりてみてひゆくさるとき 常に仏人の住られ
妨村山 みたよ 寄よ
通念集 帝王編年記云弘仁七年弘法大師入高
野山石入定処中 暑異朝取投之三鈷在此密教可

弘之一境发定七里之外西鬼却去八葉之峯善神
擁護搖高雄住此処移経像安箇中金堂者天皇御
願大師建立也四面周市七間七々四十九間即表
都率内院四十九童摩尼殿也大塔高十六丈其中
一丈八尺大日一丈四尺四佛是則天皇御願也中
門二天持国多聞實惠僧都建立也西塔九丈塔本尊金
剛界五佛真然僧正建立也御影堂者実惠僧都造
立之奉大師御弟子真如親王令書御影給大師自
手入御眼給矣

▲[illegible]

前佛ハ釈迦後佛ハ弥勒ト多の中間ハ今生を指て云
菩薩処胎経曰弥勒出世五十六億七千万歳之後
化生儀法王頂上文畧　婆沙云経於五十七倶胝
六十百千歳慈氏如来應正等覚矣　釈迦入滅ハ安
定及ト云月竜祢ヨ紀ニ　愚迷発心集云遥生
佛前佛後之中間無出離解脱之因縁矣　本朝文
粹第七云江匡衡願文云涅槃山上釈尊日早藏生
死海中慈氏月未照悲哉我等衆生進不遇釈尊退
儀住王ト云　不期慈氏限止其中間空欲帰三悪是而不勒後悔
王ノ項キヨリ生シ給ヒテ由　不及矣

前佛ハ釈迦涅槃スルトテ釈迦佛ハ死去アリテヨリ二千五百歳ヲ経タル時此娑婆ヲ去テ兜率天ニ住シ給ヒテ今ステニ去ルト云後仏ハ弥勒ト云此仏世ニ出テ給フ時ハ釈迦ノ教ヲ受ケ給フ如ク釈迦ノ教ヲ受ケ給フ時菩薩ノ位ニ住シ給ヒ中ハ五十六億七万歳ヲ経テ儀住王ト云

此釈迦ト弥勒ト間ハ我等衆生ナレハ夢ノ中間ニ生レ来ル名ト云夢ト云ハ夢ノ中ニ明カナラヌモノヲ云ヘリ迷ヒ流レテ夢ト云字ヲ中タリ

▲適受難なる人身をうけ値うことを如来の仏教よ逢ひ奉りて

文英ノ元天ノ三界ニ輪廻スル支死此生彼トテココニ死シカシコニ生レ也或ハ此土ニテハ畜ケラトリ又彼土ニテハ鹿猿トナリ又人間ニ生レトイヘ共有時ハ貴人高位ニ生シ又貧賤ニ生シ共隔生所忘トテ生ヨリ前ノ生事ハ所忘ル人ニ我前ノ生シテ此世ニ出レトイヘ共今始終或為父母為男女世々生々互有恩若生極楽

▲生もぬ生ぬの身をもいとわいれむ歌もるれい歌のるれい

○玉葉

○遺教経法の身よりひともいてゝ物のさとりをうん　為家

心要雑和集云悲哉我等雖受雑受人身値雑値仏教出離生死思願無頓證菩提志兵

○受難なる人の姿ようひかくろゝ作る又洗心さ菩提

心地観経偈曰

世人為子造諸罪業在三途長受苦男女非聖無神通不見輪廻雖可報有情輪廻生六道猶如車輪無

知恵高明神通洞達世々生々恩所知識隨心引接

以天眼見生処下略

一休水鏡云作者人ゝ

るものゝ思ひ初めよ又母もなさとり法の我

身い作者でいへ。さくんと云。行〳〵て為めゝ可

彼ゝい哉。兵へんてもなさ和ことよ〳〵。たゝ人い古

世に生しゝ子上ゝ逆り

ゝ和歌のなれ系。色ゝ敬て。又ものの作る

人身ヲ動ケ名ヲ愛ノ樹トハ

ゆるぐこゝろ

作レリ

「なほもなさ方へのゝ

ゝ上とリトテモ足りてとりあれぬり可時

道キトト云

理ーもん

（カンフズ）

夢子ノ前

▲千里をゆもをうゝ

止視曰千里之路不謂為遠千里兵

戦国策曰儼然不遠千里兵

謂為遠數歩之地不謂為近兵

生ヲハ忘れハし

（カヤウニコ世界）

車輪ノ如ク

タリメクルニ

鳥獸ニ生レニハ

仏ノ教ヲモ聞ケ

叶ハズ苦ノ

スルトテ得ズ人間ニ

生レタル時仏ノ

教ヲ聞ケ

ノ道ヲモ聞ケ

成仏ノ理ヲ知ル

事ヲ此逆リ

世ニ生レ子上ゝ

ヨクレタキ故ニ

人身ヲ動ケ名ヲ

愛ノ樹トハ

作レリ

生れぬ方ゝ月れの歌ものゝ

せ上ゝ

▲鄙より出家とそなる人の法花方便品曰我常獨處山林樹下若坐若行常行禪定矣　一ニ身と心とを修行とこそ
藥草喻品曰獨処山林常行禪定矣　一ニ身と心とを修行とこそ
古
○いつく小う世をいとうんとて肥ゆもふまもとふらるれ蠢
世の学者小所小法を
他ぬれば身と法とを捨てさるべきなり
▲分い学者をさとるべ
▲ちきこそ
▲こそや学者へい憍慢むさるべ
小所あるうし所いんよ寵愛せうるゝ、妻よ者
ふを　玉造云壯時憍慢宋甚矣　大論曰憍慢是
瞋恚之本矣　俱舍論曰憍由染自法慢對他心挙
矣　弘決云自矜曰憍陵他曰慢矣
▲翡翠の簪へ啊娜とたをそ楊柳のまゆの風よりもび

くろ女

玉造云娜腰支誤楊柳之乱春風矣　翡翠ハ鳥の
名也又翠共云。簪よいるの放を絡く。楊貴妃よ注ス。
楊柳ハ二字共よやるぞく。　翡翠ハ格物論云形小
不盈握一種而二色翡赤羽翠青羽矣　色葉字類
抄云翠鳥尾上長尾也俗云翡翠也矣　婀娜ハ韻
會云美貌矣　曹子建洛神賦云華容婀娜令我忘
餐矣　遊仙窟云華容婀娜矣
▲又雪ちの柳ハ　小所ぐものこをかめる
玉造云雪嚬三春之始早翫雪梅矣
▲鳥をふくめる糸萩のかゞと牛よ敷るもの

又ぼうとうふ流もあり。是を絞りて。かたい豆
のかす。揚川よりをを

▲新い人月清くすゝ　清くまいてうきく人めを
清むこと。　源氏帚木巻に云てきぬうくてすゝ
げよとて

▲雲井百敷や大内山乃山もるも深み入もとつめし
水源てすゝ　大内を雲井といふ。天子を日の出
へ。清を月に雲井或い雲の上人共云。ケ様の詞多し
雲井ゝ　百敷ゝい河海抄云百官の庭を敷
百敷ゝ　八雲御抄云百磯城

ゝの家ゝ也　後水尾院歌大観抄云りきき乃
流ハ清りうらく。秋名所ハ清くゝ。恋しく道遥
大内山の山守ゝい。拾遺中書優乃武士を云
新千載集源二位
○人ゝ也ぬ大内山のうるハ水源てのゝ月を乃うる　頼政
新設集云此ゝ乃河云る。大内ち優なゞ。顧上西ちゝれ
ぬゝを云ハ西かもうゝ。切要なりて侍る。
大富士小家よりくれ石て侍る。月あつゝをくれい丹
波の内侍のりゝ遣しゝ侍る

▲島羽の京塚秋の山　京塚ハ在下名羽号京塚寺
盛春記云遠義武者所盛遠ハ他の妻の戸ゝ有りゝん
て。其ゝ夫を殺し妻を奪ゝんゝを則ちを妻ゝ

毒飲て甚く苦悩し室に入て死を待一説云盛衰
記に或云夜叉ひのくに文の前を切て云れ如く人を
毒の前と盛遠此毒の貞心を感し且悔且泣く
髻を切て成改文覚と高雄に入て懇ろに出家
此説協い彼毒の前を埋める塚と云　長門本平家
物語云盛遠が殺ちい渡る衆門が毒と母を云川と
云彼女房を名を云へかるよりる盛遠出家して
盛の字を法名として盛あるを仏と云でドる共外
女の背を刺てくろの国に帰りて三年の忌を
と云ぶ中だと云仏退治るをしたとめて今の法とて
いのりる渡唐も出家しく法名渡あるを仏と

門名 西方 或云中ほの中の渡新蓮の家の前渡
と云者の墓にあるとそいつる女ろう母の名を云川と
云そのむとめるをいとて袈裟とも人いとびるる
秋の山を在上名取面若比訓よ名取法皇の離宮
あり秋の山は中遊覧の地の一つといろう
安樂壽院記云古老傳鳥羽秋山者離宮掖庭之假
山又今中嶋村者南庭池中之芳洲云々

西陽教祖
日月中有樹
高百丈下有人
常卧之割面合
山城名所
橋川ふもと

○続後拾
衣ろの名取田の里の稲莚衣ふるるは秋の山　後光
名取い紀伊郡と小枝潟を海て少を上名取面を下名取

本川縁
月性
月の桂乃川流水　月の桂い羽衣よ渡を
長谷川
治兒月
無奏博珍白吳川伐月桂之枝起于階唐之後
善見曰方儒城云乞食

▲心ある卒都婆にてん

僧祇曰乞食分施僧尼衛護令修道業故云分衛矣
弥陀経義疏云比丘或云苾芻此翻乞食資身乞法
練心矣　乞ハ仏法修行のために食を乞し。此僧の
乞食ハ世にあらぶれたるをいふ

▲教化しくのたまふらくハ　増韻云凡以道業誨
人謂之教躬行於上風動於下謂之化矣

▲おもへり此稀なりけれ

▲いふ乞食乞丐人　説文曰乞求也丐乞也亡人為
匃矣　蒼頡篇曰乞行請匃字体从人从亡言人亡
財物行求匃矣　無量寿経曰貧窮下賤乞丐孤独
矣
乞匃丐の三字共に字意同じ

▲忝くも仏体色相の卒都婆にていふさう

▲ろここ上之のさ
仏体によりしき卒都婆とく。　釈氏要覧云梵語塔
婆此云高顕今略称塔也又梵云蘇偸婆此云宝塔
又梵云窣堵婆此云墳又云抖擻婆此云讃護或云
浮図此云聚相矣　秘蔵記云有舎利曰卒都婆无
舎利曰制底又曰斯底漢家省略而呼卒都婆曰塔矣

てよのあをて体みんへ

▲仏体霊の系とハ私ぬ之たれ

▲是須ふ文字も見えぞ刻める故もなし唯栴木と積て

▲たとひそれ

ワキ

涼山の栴木九相詩第九古墳相詩云石上碑文消不見矣
二人は丘尼云今宵ハ此の墓にあかさいやとおもひ立よ
りかくあまの体を見給ふに。苔むしたる石塔に蓋
かつらひきまとひ。枯したる卒都婆文字も見えぞ上書

あの九苑咲ろしまいうくれ有しいきんやは
和西朝めん

未なと運　ゆかし
一 三五テ　心此花のまさあれは
わかれたるいとまなき

文子相違云ふさおとのあり小松の卒都婆ぞよも
たゞなしかく文字さへながらに清めるはなし
これもさるに持かもいは古墓何世人不知姓与名
とゆきての人のかたちをさふなりゆくものぞそ弘おる
ふくあらさなきことく

文 卒都婆は金剛薩埵の假に出化して三摩耶形を現じ
金剛薩埵者金剛部諸尊通号也。十六尊最初金剛
薩埵亦曰金剛手 大疏一云梵云播尼即是手掌
掌持金剛与手執義同故経中二名互出也矣
理趣釈上云此菩薩本是普賢従毘盧遮那佛二手
掌親受五智金剛杵即与灌頂名之為金剛手矣

三摩耶形者梵語也又曰曼荼羅唐云本誓曼荼羅
有四種一色大曼荼羅云衆生地水火風二三摩耶
曼荼羅衆生心法有半月蓮華形三法曼荼羅指諸
尊陀羅尼四羯磨曼荼羅行住坐臥威儀為即身成
佛儀式　已上大日経文略　婆の意は卒都婆の中に金剛薩
婆の出化し給ふ三摩耶形も皆こもるぞと云べし
・六日の種字は出く三摩耶形さまざま文字形とるる
地水火風空五躰五輪は人の體に仰し備あり
金剛経略疏曰卒都婆是密教胎大日三昧即形而
以究竟五字為五輪種子々色身五躰也
謂之如意半月三角圓方本長作三尺七寸若三十

七尊表示也矣　五論者長阿含経曰二肘二膝頭
項謂之五論論者圓轉之義也亦云五躰矣
人間の体は地水火風空の五つを具す。地とは身の肉
をいひてたもつを云。水は身よりながれいでを云。
火は身のあたたかなるを云。風は息の出入を云。空は
耳鼻口のうとろなるを云。又眼の色さい天よりか
さなる。是の故なるは地は骨肉よりなりは
初七日赤白二滴凝るの乃至五七日を。其形五輪
なれば。今卒都婆の形則人間の体也 見圓覚経及倶舎論
卒都婆永離三悪趣と云。直
和泥合水集云一見卒都婆永離三悪趣と云。直
自性と見得れば。永く解脱を得る也と
金垢浄光陀羅尼経曰卒都婆陰辰時至日中入金
間八時底日中至日没至亦想天故衆生皆離苦得
樂矣
一念発菩提心　大般若経曰起一念金上菩提相
應之心即能折滅矣　華厳経曰一念発起菩提心
勝於造立百千塔宝塔破壊成微塵菩提心熟即成
仏道矣
婆ゞ世をもいてそ心仏いそ
金　ふそ世をは捨しゞ
ふれは順縁よりも逆縁なりと

▲さふでうど　卒都婆ハ勝とうけ〜るハ順縁ハ北を。逆ハ南ハ。此卒都
礼をばるそ　婆小ふるゝ方ハ逆縁ハ小浮ふべ〜と云ふ〜
手ハ手ハ指ハ
多ハ多ハ　圓覚普賞章曰現逆順境猶如虚空矣　同疏四曰
▲とてもハ　違情曰逆隨情曰順矣　大恵答王内翰書曰或逆
たるハ卒都婆ハ　或順都莫思量矣　恵心観心略要集云逆順俱徳
婆ハ　縁互欲蒙引導矣
体いろ〜
いう

▲提婆ハ悪也　観音の慈悲　法華玄義曰調達是賓
六度集経　提婆　悪ヲ自ラ
悪ヲ也　伽羅菩薩先世大善知識矣　入大衆論曰問彼提婆達多世々為仏怨云何而言是大菩薩答若是怨
地獄ニ入テ人ヲシテ
ヤウニ　悪ヲ十ニ
青ノ色ヲ知ル

者云何而得世々相値矣　礼三品アリ　中品ヲ上品ヲ　礼ス　中品ヲ頭ヲ把ニ　ハ上品ナリ　大論
無量寿経云提婆ハ悪逆ノ流生の乃至若知識醫師の恵を

提婆ハ又ハ
観音ニ云フ

恵を用ゆ。上醫ハ毒を恵とす。中醫ハ毒を毒とす。下醫ハ恵を毒とす。此ハ如く知べし〜と云ふ〜
観音の慈悲ハ〜井守ハ汝を。提婆ハ逆ハ汝を

▲槃特ハ愚癡也文殊の智恵　槃特ハ釈尊の弟子〜。
仏著大学道〜。法を聞て愚痴
愚癡迷ハ者ハ　也。守に接意身莫犯。如是行者得度世と云。十四字を
悔を生ずるハ　弟子同紙ロト
ヲ〜ヲ多ヤ〜
名荷ン
古ヒ文ヲ云

佛。文殊の弟子ハ作ル〜之事の間を。ハ〜れ。
作ル〜愚癡弟子一の槃特ハ〜ハ　見出曜経及法句経
槃特者　名義集云梵語云周陀或云周利槃云大
路邊生佛本行経曰其母是長者之女隨夫他国久
而有孕垂産思帰行至中路即誕其子如是二度凡

生二子乃以大小而區別之大即周陀小即莎伽陀
矣　文殊者　名義集云文殊師利梵語此云妙德
大經云了了見佛性猶如妙德淨名疏云若見佛性
即具三德不縱不横故名妙德無行經名滿殊尸師
利或翻妙首下畧　不動經曰是大菩薩戴五髻冠頭
五種智慧矣

▲惑と云も苦提なり煩悩と云も菩提なり

上の句を今宗門にて結して云
提婆が惑も観音の慈悲。無著が愚癡も文殊の
智恵と云則ち惑を菩提と云ふ。煩悩即菩提也。或
い終に一切法云云。悟の眼にては提婆も。観音も。無

特も。文殊も。惑も菩提も。皆悉く平
等一致と見るなり。是を中道実相といふ

▲菩提本樹よりあらず明鏡又臺にあらず　実本来一物なり

神秀首座頌云身是菩提樹
心如明鏡臺時々勤拂拭勿使惹塵埃と仏祖
六祖恵能頌云菩提本無樹明鏡亦非臺本来無一
物何処惹塵埃六祖壇経及傳灯録

▲本来より愚癡の凡夫を救はんとの方便の

愚癡は東岸居士より汲て。方便は湯谷より汲て
凡夫者　釈氏要覧曰大威徳陀羅尼経曰於生死
迷惑流溺住不正道故名凡夫梵云婆羅陀言毛道

▲行人ならわ
ヤせぬ

▲ふかい時

謂行心不定猶如輕毛隨風東西故矣

▲法よ惰なる凡人ありとて偏ひがゝへを改めつをて三度礼一

ちからとなるとなれるとよむ

▲行人い

小町憍慢い甚しきを破し。惰なる凡人と成て。乞食

法集経曰出家為成道行乞食者

礼拝の多ハ仏明寺よ法を

破一切憍慢故矣

三品礼度ニテ
三度頭ヲ地ニ付

▲極楽乃内ゑハ私行ゑめとい行ゑ若ゑるゑさ

分のゑい小町をとがよ腸をうけゑるを。偏のとがめゑるなふ。

仏神のをとハよ腸をうけゑるい。極楽の内ゑくゑハあ

しゑめ。今せをとて若ゑるゑとゑんを。肉外と

むつゑの

僧の教化也〳〵

云河よ。卒塔婆をあゑいゑ。但此分河不見せゑ。

極楽ハ仏国ニ
此極楽アルヤウ

僧ト八世間業
ヨリステハ世ヲ
私法ヲモテ
其和ヲ国ムル
ヲ僧トスト法
苑珠林ニ出

教化ト八仏法ヲ
教化ト云ヒ也
ニテ先ニ化ス俗也ニ元来ヲ以化
ロキ

ゑめ。苦ゑるゑ

さゑい。又云極楽の内外と

よ無と云も云こと

分のゑい大ゑ小町をも

小町ゑ多よ行ゑい。

▲教化とハいゑゑる人ゑ

ゑある多ゑ人ゑ

多を出るのゑ人

王造云予問女曰汝何郷之人誰家之子中畧女答テ

曰吾是倡家之子良室之娘矣

▲是ハ出羽の郡司小野ノ良実ゑ娘小野ゑ出れる果ゑ人ニ

大系圖云出羽守良真小野篁二男。大内記石見守

後生之弟也。一本當澄又名常澄有女二人妹名小町哥人也矣、古今集哥五首はべりてうれやくなのとゝめる哥。小町がおもかげとも。小町がこの〇を仮名とゝ云。同哥の中に小野小野の家。よみ人しらずとゝ云也。実は小野がおもかげ人しらずとゝ云也。実は小野がある伊勢おうゝ哥人しらずとゝ云歌也。仮名の陽炎と絶妙よりてゝ人しらずとゝ云歌也。仮名の陽炎と羽列ゝ人しらずとゝ云歌也。仮名の陽炎と院内の周小野村よりて哥実の名所とゝ有り世俗の赤の方田の中より小野の嫁を世俗より落赤の苔菜ゝ有りて毎年九十九梅咲とゝ云り

職原大全云郡司者昔毎一郡有大領少領主政主帳曰之郡司今世如郡代者也矣　出羽国八葛城より花を

花ノ姿ウツクシクヨキカタチ

二月

▲痛りやうの小野いさも古へ遊女として花の姿うゝ美玉造云朝向鸞鏡黛蛾眉而好容貌矣　私云小野ハ遊女より姿を。優なる女と云義歟。他玉造より倡家之子とゝ。

説文曰倡樂也矣　増韻曰倡優女樂也矣

六書正譌云倡作娼亦也矣　倡家之子とゝ遊女の名

花の姿を云。世義より傾くを造の小野と云ふ

の小野と別るとゝ云ふ

▲桂の黛ゝ云ふ　桂ハ月の異名ゝ　説文曰黛畫眉墨也矣　釈名云黛代也減去眉毛以代其處也矣

黛の如くなるを云。ゝ月の形より似る所ゝ。桂の黛ゝ云歟　遊仙窟云出雙眉漸覚天邊失月矣

一 従額の白ぎいの下より墨をこまかにしてうるをこの人つけたらんずるを柱眉と云たいり。返面可絶

▲白粉を絶さば　白粉ハ有しるいし。　王造云面不絶

白粉顔無斑丹朱矣　説文曰粉傳面也矣　周礼

註曰古傳面亦用米粉又深之為紅粉後焼鉛為粉矣

博物志曰焼鉛成胡粉矣　續事始云鉛粉殷紂主

時始造出之矣　實録云輕粉秦穆公所造矣

▲羅綾の衣多くしてくたくたの間よりあらわるるを

王造云羅綾之衣多餘桂殿之間矣　羅綾いろとおり

綾也。　強い袴英の泪し

▲ゆをしみ待を作り　王造云待花時康王筆詠紅樓

紫藤之和歌矣

▲醉をとらくむり　王造云手取鸚鵡之觴漢月落而影静矣　韻會云

漢天河也矣　詩云維天有漢矣

▲肩よい裏蓬を戴き　王造云頭如霜蓬腐似凍梨矣

又云鶴髪如霜蓬鮐背似凍梨矣　白氏文集二十

▲婿始しうし　王造云愁集鬢似蓬矣

双鐵も遠しの色をとくるふ　肌よ悴く墨乱き宛猶しうし

婿始ハ韻會云美容矣　宛猶ハまうしうし猶と双鐵ハ

肩し鐵しくと出よたくふ。　陸佃云蛾似黄蝶而小其

眉句曲如畫矣　色ふかい色をあさ山ろう色も今い

悴〻〻〻　説文曰悴憂也矣　廣雅曰困悴也矣

白氏文集云婵娟兩鬢秋蟬翼宛轉双蛾遠山色矣

西京雜記云司馬相如ゞ妻卓文君ゞ眉をふの如し

時の人皆効て色しふ眉をかくとゝ

▲石ゝ色ゝ一ゝ色たゝぬ汚くもの〻

伊勢物語の歌。下句白い歌も歌〻し面新よ月西と

ゝ。須臾墨之　肖図云ひるうられ十れよ此を。老て

もさすがゝゝをつゝ。つゝもゝゝ海よつゝもとゝ云

藻ゝ。人の髪乃ちぐゝゝるよ似う藻と云〻

闕鈔抄云江沢藻髪い老人の髪絶くゝりて。藻と

老の髪ハ

汚くゝ移ゝるゝゝゝゝを云〻　九禅抄云作物所

ゝてゝ。おを作ゝあゝ。細工よ物を作ゝつゝよゝゝ

ゝゝ髪ゝゝ　云字本よ築蛛神と云

此方ハ小所寄老く葉子を云ゝ時。葉子此方をゝゝ

ゝゝ。世よ小所をゝゝゝゝの姥とつゝ此方ゝよ俗く云成

へし。小所ゝゝゝゝ小此を。冷泉流抄小六十九巻ゝ卒

ゝゝあゝ。　拾芥抄云小所四十八ゝくゝゝ

ゝゝ云へいゝ巻ゝ。ゝよのゝゝゝゝゝゝゝゝの色

よ人のゝを抜ひくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ色の

顔をゝゝ。面のくゝいをひひて世をつゝ。里よゝゝゝ

色食をゝて食をゝゝゝゝ。ゝゝも小ふの色ゝし

まて有りし。たんぢうさまいひしりの。家来の者よ
おくれく。孝養のあまりに。昔話をいとなまれし。あるとき
れいのふを食北人集りあるゆへに。あやまりさと
ちうあるものなり。あるさまあやまりて人よ同れいおを
こそ世ふやうしに小町と云迦このことくいなりさと
気をてよりひてあるくいを酒をこのまをく。れいの黒く
ねうさいくるを庵を指ひくあさ。やるひ素ふ去なり。
小町ゆ年暮さ。ゆ三人あり。二人いさきのさきの腹のみと。
一人い小町よりて三郎よりなり。名をたむ〜の三郎
なをたぐこそいひなり。板なりさと為ひまうさく怪尚
常ふ立ゆりい新しくなさけなんに男ふあなましのの
ゆ〜ぬ。三郎なりなりい実子なれい我母の若時なりさと
るをを伝へく。いうなる人とも我母よおいをんをひ
て。おとも中ねさう母よ出く結去なるゆよりくる
のにふ立つをそかり〜〜いひて。ひあをなり。え家
え家の年さ。小町ゆ年九。年ゆ年三暮。なりなくは
十八暮さ。年年ゆふ

一百と年ふ一とをたぬ行くもゆ我を為〜ゆるけふ
しなり。百と年ふ一とをさ〜ゆくいゆ年九〜云なをまり。
絵よ九年九よいなり〜絵年ありくつりをいんをてかく
まあり。年年ゆありつ〜さんとも。をつ〜ぬんとも

▲有明　高明なる所なり

▲栗豆の餉を袋ふくろに持てゆくなり

王造云　栗豆之餉　餉八于飯也　栗豆

廣韻云自家之野

曰餉　詩經良耜篇曰載筐及筥其饟伊黍　注

盧陵彭氏曰其饟伊黍毎珍味也　又毎羊篇曰何

蓑何笠或負其饟

上地

▲後ろ背にくゝる袋ふくろ　垢膩のあるぬぐひ

王造云背負一袋　容何物　垢膩之衣　法華信

解品曰即脫瓔珞細輭上服嚴飾之具更著麁弊垢

膩之衣　垢膩とは垢づきぬぐひたる衣

上地

憲問第十四

▲肩に掛ける筐ふは　王造云左肩懸破筐　筐ハ竹

史記方言注曰籮形小而高者　江

東呼為篣今按又用簀字　白氏文集云右手棄

遺穗左肩懸弊筐　宋

貪人のもとにさる　孔注云筐ハ竹器也　物集云小野小町が老衰しく

▲白黑の芋　王造云筐ハ何物　田黑葛　芋

蕨と折くべ　黃ふくべ　蜂みつ

畳をくして　懷を抱く　物をしまう

白黑の烏芋とは白黑の二種をいふ　李草綱目　蹲珍

曰烏芋其根如芋而色烏也頌曰烏芋根如指頭大黑色皮厚有毛又有一種皮薄無毛者亦同田中人並食之矣　時珍曰慈姑一根歲生十二子如慈姑之乳諸子故以名之恭曰慈姑生水中葉似鏑箭族頌曰根大者如杏小者如栗色白矣

地

▲彼之蓑彼之笠　壞蓑纏腰矣

玉造云右手提壞笠矣　又云頭

地

▲おりてとりもかくさ行も

▲洞をさふへさ行も紐もあるいて

言葉集

おさふへさといはあるいくなくふ所あらばとくく洞をぶ

あさもへさ行も紐もあるいてじ

葉集

○ものさしくしくの内ふかあさつい紐もつむ洞さろ　選伊勢物

▲さふ路頭小さくしひ住来の人よねをさふ

玉造云今見寡獨而跰道路無益廻人間從懷生前之恥矣　路頭といふちのかりさく

這是生死路頭矣　朱子語類云

らひ共云。さくさく相通ふ。帰本、者云ふ形さ

世ぞさくさくふん。あり

日本紀ヨ流離、河海抄ヨ吟日孟津抄ヨ玲俐

云　杜甫詩云已恐伶俐十年事矣

▲くかくび　墨田りよ浦さて

▲のさりよ色ふ浦さてあるさの玉章さるさの文

▲五とてそ　玉造云君臣子孫爭婚姻於日夜富貴主容競侮儛

おあとて
秋冬こさ
うおむ
沖そ
シテ いやかりと
いか合

於時辰矣

▲かきくれくふる五月雨のそらと切りたる一簾の尾すらすまそ

宝治百首 ○かきくらし後五月雨のはをへく名の小川の音まさるなり　女房内侍

さみだれとハさハ五月の暑湿。ふぶれハさぶるくと云儀なり。

源氏物語ニ 尾と云ひのきれまやそでぬまちる人もなし　注

細流ニ云空のきれハて雨風のぶれとく　雲居ノ集ニ云

「あまあまあめまのいハきさうき暑さうさもさみぶるさのふ　とあり

雨のつまくふりさるをと云儀そ。五月の雨をさみだれと

云成べし

▲五 のかいとせニ

二

あをぐむくそ
あらくむふや
あうふ云々や

六 平 ▲

神楽時用之

▲源氏の比丘尼乃女将の借銭定るをしも　車の欄ハ通小町ニ注　上リ下リスル物

▲浄衣の袴　白き袴く。或ハ明衣共云。布りそあてもなく

ありく神官皆ナ是ヲ用之

▲立烏帽子を風折狩衣の袖をおろひく

立烏帽子ハ本式也。風折ハ略儀之　立烏帽子ハ堂

上一同ニ着用也。或ハ右眉。諸眉ニ子細あり。右眉ハ羽洞

ニ於ても摂家ハ小諸眉。諸家十六歳以前ハ諸眉。十六

以後ハ左眉之。　風折ハ左折右折依家ニ替也。老者ハ

折之　摂家ハ不折　清花大臣家等も不折歟

西三条加不離挟云　摂家清花并ニ中院三条正親町等

家ニハ立烏帽子を用ある。其ハ外羽林家名家等ニハ

多分十六才より立烏帽子を後折烏帽子を用ゆ。

鷹狩蹴鞠馬上の時ハ何れも風折乃由なり

狩衣ハ元ハ狩
仲かふ服ニ用
すてしをはえするなく
かりぎぬ布衣鵜衣ぞ
衣と云々なり
あの狩衣ハ
まじし此狩衣
紗の形衣
いは帝面見之
又五位以上ハ織物
六位以下ハ無文
官ハ制し
殿上人ハおせい
六位の人も以て
紗の狩衣と

同扶云立烏帽子と。汎抑て貴賤小所の徳やうん立烏帽子を用ひ。狩衣の袖をおかつひてとゝりるやう。續世後と書に云。むうい烏帽子とりくやうもなうり名成へし。世俗てさびえぶ〳〵し。

▲本の系ふの付図　本乃系ふの落名をけ図と号る。從家号之

▲斬乃むあるとゝくゝと

○西流ハ行のむあ法ぶゝといたぐや却をんゆくまて

一夜二夜三夜四夜五夜六夜七夜八夜九夜十夜のあり。世俗ふ小所等て此数を九十九夜合せり。一夜を一ヒ。二夜をふ。三夜をミ。四夜をよ。五夜をイ。六夜をむ。七夜をナ。八夜九夜を七十二夜とゝ十夜を十とも。合せて九十九夜とゝる。之外從ゝ一墨

▲豊の明乃節會に杜若を紀て

▲庭の時をもうくゝ

▲あうさの

▲嬉い家ゝ高之庭ゝ剛ゝ広小庭ゝ

日本記樂府　宴會の作り初後ゝ備ゝ久米節

青中ゝ春日ニ

土佐ゝ年ゝ

補ゝ陵

御ゝ大

雲ゝ

殿ゝ御ゝ

中ゝ年ゝ日ゝ

ゝ高ゝ高ゝ

ゝ高ゝ高ゝ

ゝ高ゝ高ゝ

說文曰雞知時畜也矣　韓詩外傳曰雞有五德首戴冠文也足搏距武也敵在前敢鬬勇也見食相呼仁也守夜不失時信也矣　本草綱目時

珍ガ曰雞者稽也能稽時也廣志曰大者曰蜀小者曰荊凡介家無故群鶏夜鳴者謂之荒鶏主不祥若黄昏独啼者主有天恩謂之盗啼老鶏矣

◆曉の搨乃ちしろさ　通小町小町にて

◆砂を塔と重て黄金の膚こまやかに花を仏に向つて悟の道にいらうよ〳〵

童子敎云聚沙為塔人早磨黄金膚折花供佛輩結蓮臺蹤矣　方便品曰乃至童子戯聚沙為佛塔如是諸人等皆以成佛道矣　文集二十五云弄沙成佛塔鏘玉謁王宮彼此兒戯矣　花供養八半蔀にて

拾玉　○納めおくもとの舎も身にかひくさうらう膚とうちつゝ社おもふあ

玉葉　一もとを折くれ帰る花のえに悟ひらくる身とぞ成べき

関寺小町

宇治拾物語云小野小町が一旦太江惟章が妻なりしが仏かいをせしより彼よの名の仁明の御子基蔭親王に仕へ後ふ君に後く尼になりしを後弁出家の弟子の妻となり、おとろへて後ハ逢坂の邉ニ小屋をさしてなく愚見抄云小野小町大江惟章が妻小なりて莚業に下りたるが後小尼になりて関寺の辺りになりておる鴟鷺記云いくぢくうんの人をあやすしとひえ花。おとろへなきハ都にさまよひ、都にさまよひてハ関寺の邉に庵をむすひて、此邉のワの草よいのちをささへ。うきすまゐをせしを、智證大師の御弟子くろ〳〵くき

七月の比法あるとてめされしよ。為のものさまとそ
てあるべきし時。比叡山に登りかのや
げぞしつびくんも。法よあるれよ。そのそ
を食て成て。若志のごれし往。今はてしれ行よ法
次の殿と云うと　文廣四百人一を拭を法ためし
家乃紀　乃定　同小町小所のおちけ所と城の井か
の里ありとなん可長ると　今案冷泉家の拭よ
小所六十九案。於井寺死ると。又仏法及ると
拭よ業子奥只八十為よ。小路小町が戸を求と
ち。何をとるる　小町事卒都婆小町ニ記ス
伊呂波字類抄云閑寺會坂関之東近江国之内百

道場畠塘不知何代之草創舊傳云此地者是関寺
也空舎壮蘇佛像高大往年頽毀多経星霜丁畧
今昔物語云此寺の佛ハ弥勒ましく庵まして。彩りよ
仏菩も破壊し。仏も朽て失られ。菩の冥寺の
跡として礎半埋ぬ。其後横川の源信僧都是
を思ひしく寺の如くよ造ましたんとし給人先僧都
発心ひられい。此次の聖人故僧都の高ひ為ら
拭よ。仏を作り。菩を二階よ造て。上の階ら。佛の
御丈ハ四丈八尺。仏の人ましく拭ましてまつりら
ん

枝桑畧記云万壽四年三月一日沙門延鏡
供養近江国志賀郡世喜寺奉安置旧造丈六弥勒

菩薩像一躰　字類抄云治安元年十一月十一
日松崎寺僧證昭来語云去八月夜夢一僧来告云
汝奉拜関寺弥勒佛哉答曰未奉拜僧云今生若不
奉結縁者當来何欲蒙引摂哉件佛者迦葉佛之世
為純金丈大之像釈迦出世之後又奉造其像矣
暦代之間頻以藏失然而今又上人改奉造立也裏
今若物語十二云今いはゝる左衛門太夫平朝臣義清
と云人有けり。又を中方と云。越中守よりなる
時。ふるき黒き牛一頭と得たり。中方京来ぬる
事あて行。清水よりおもてをもへり。清
此牛を大原よりある周防国正則と云者よりもへり。

彼牛は賀茂寺の童人賀茂寺を作造らるに。雑役の宣
車を持。牛の奇を見て。正則此牛を童人よりもへ
り。童人此牛を得て車よりはずして寺の材木を
引しむ。後小之井寺の明尊前大僧正の夢に賀
寺小僧彼牛。雲の前に繋べし。僧都是いい
けるの牛也。牛云て云。我は是迦葉仏之。此賀寺
仏法即りんぐ為小牛と成て有ると云て見て
覚ぬ。僧都是を怪し。多くの僧を引將て賀寺
に行て。牛に向て問て云。雲を之廻て仏の所へ
向て庭に臥を。僧都此牛を見て仏を之廻る
希有のことと云て弥貴と行ふ。京中の人成不行

云ふなり。入道大相国、閑院太政大臣公季、公卿殿上
人女房い、鷹司殿関白殿の北の方皆来給へり。或
時聖人の夢に此牛我此寺のゆを勧め畢明後
日の夕方ゆりうんとすと云へば見へく変見ぬ。此
るをこれ井もの給ふの御の体に去り。これ井寺の人参集りて
尺給へ。板其日に成て。これ井寺の人参集りて
弥陀経をよむるこをを雷うん。漸く晩方に成て
卧こる牛こて。書をこれ函廻て後。牛屋に返て松を
小ゆ〳〵卧て。度入如るゆ〳〵死て。そ所に有るゆ
上中下の貴賤男女音を挙て泣合へり。刑牛を
此処に葬てゆ〳〵いと云て第さりぬ。こ後所〳〵に

仏るをあ〳〵るゆ〳〵こ〳〵

案寺竹林云霊牛塔或曰迦葉塔古供蓮祭之今廃
而知者鮮こ〳〵

▲待こ〳〵今で移よあゆ星のゆを急うん

星祭ハ七夕祭共。又乞巧奠共云こ。天宝遺事云唐
帝宮中七夕結綵縷陳瓜菓酒祀牛女妃嬪各執九
孔針五色線向月穿之者為得巧矣日本ゆ天
結天宝天平勝宝七年ゆ始る。所殿の庭に机を
置。名〳〵の物をうさう。こ〳〵いゆを入。大文の星
をうけて。又赤色の糸を竿に掛てゆをいの。
こ年の内よかゆ〳〵云 公事根源及年中行事

▲是ハ江戸冥寺の位牌なり　亀坂の冥のあるさ、
右の方ゟ冥ちる也、此亀冥の碑、冥の清水、冥
の小川なとゝいへ、皆亀坂の冥小名くの名、江戸
田村ゟ流る

▲七月七日　荆楚歳時記曰七月七日世謂織女牽牛聚會之日矣
晉傳玄擬天問曰七月七日牽牛織女會天河矣
又朝鼎ゟ紀る

▲颯々たる涼風と裏鬢と一時ゟ来る初秋の
白氏文集十九云蕭颯涼風与裏鬢誰教計會一時
秋矣

▲呂竹呂律　呂竹ハ嫡孫ゟ流る、呂律の子、呂と律と
のつゝらハ　陰陽十二個ゟの中、六呂ハ陰の名にて和ゝ、
六律ハ陽の名にて、こゝ〻ゟ〻ゟを云、李約瑟ゟ
ゟハ呂と名ゝ、律と秋ゝ、呂と呉約ゟのゝゝ紀
めへし、　物語紀云呂律の子律ハ雄風の唱ゝ、その
ゟ名ゝ、呂ハ雌の唱ゝ、その子を得ゝ狂ゝ
漢志曰陽律為律陰律為呂律以統氣類物呂以旅
陽宣気呂皆曰律陽統陰也矣

▲姿婆の形を称ひの糸ゟ人て　姿婆の形ゝハ、和名乃
形を云ゝ、三偏ゟ流る、孔の糸いゝ也の名と筆ゟ掛
て、七夕ゟ流ゝ、ゝ形ゟ流るといの、ゝを孔の糸也

古今事林抄云孔子の夏竹の書をうるしようやう
たようてを為たようてを為しいろうとうく
白樂天詩云憶得少年長乞巧竹竿頭上願絲多 即詠集
初学記云女子以五色縷慣金銀針献牽牛織女 兵
古 ○七夕まうつる糸乃ちくく幸の孫るく為ゆん
糸をくてといを色をのくうるをとうりくいゆの字延の字を
をひりるくはくくらくありくありくるくいるも同一
ふるり紙をくてをいるいい紙をかうるめくし又かうを
へていつるくうるくさくるもいうりはるるをふかうをく
てはくをいかりくよあるるし変るくはををるようく
ふかいるへし

▲織や綿のうるく蔦　綿の機をうるけうう、音蔦抄云うる
蔦といふの蔦ををうるうく　油中抄云或万葉裏書よ
うるく蔦といふ穂の出く、蔦をさげうるやうる蔦ををいし
で紙間ドうるく

▲事の玉琴うるくるるれ松風まくも打掬の
琴うの事小畳のれ風うまるしの方をかくよせうう。
庭よ琴うをうるくくるをふよ留を、庭の玉琴とをいく
玉琴ふ ○庭のをふひうでよ留る琴の孫を事をかふうれ琴の孫 大政大臣

▲朝よ一鉢を得えれ共求るよあるいぞ
傳燈録曰一瓶兼一鉢到處是生涯 兵　佛祖統紀
曰畜一鉢無長物躬拾薪汲水 兵

▲花因(テ)雨(ノ)過(ニ)紅将(ニ)老 柳(ハ)被(テ)風(ニ)欺(レ)緑漸(ク)低(タレリ)

是ハ百聯抄解(ノ)之詩也。本文に紅将(ニ)老(ナリ)ントスとは、詩の心ハ雨つよくふりおつる時ハ、花の色もうすく成するなり。あざむくとは風の枝をうごかすなり

▲人丈にワつさるかし　安達原に須そ

▲老の鶯乃百囀(モヽサヘヅリ)　老の鶯ハ陽春に須そ。百囀とハ声多く鳥の集て鳴をいふ。文粋云前(ノ)中書王詩(ニ)

月蒼々(タリ)鶯百囀 兵

○鶯の百囀りをいくかへりきゝつ春日に鳴らしらん　顕昭

▲稽古　鞍馬天狗に記そ

▲埋(ムモレ)木の人知れぬ身となりぬ花咲(ハナズキ)ずに出(イデ)とへさかりもあるべし

古今仮名序云 色好の家に埋木の人知れぬこととなりて、まめなる所には花薄ほに出すべきことにもあらずなりにたり 上下略

采雅抄云 色このみの家とは、埋木の人知れぬこととなりてといは、好色の家には、埋木のごとく、人知れぬ恋路のあさはかなる。そうつくるものなりと心をすると云。まめなる所には花薄ほにいでゝへさるものもあら須なりにたりとは。実情ある所には上下に云所乃物をさそひ出しうかさるを花薄のほに出ぬやうにかくしなくて云ふ。むもれ木ハ人知れぬ。花薄ハほに出すへきといいゝん料(レウ)之。埋木に花落

▲心を種(タネ)として言葉(コトバ)のたね一席にそまへを對しく云ふる筆跡もしるく

古今倭字序云やまとゑいの人のかを擬らして万の
言葉の義ふしをあらはす名をうく。菜雅抄云人のかをた
ゝしてとゝ。かのうゝまりの出しをして万のことの
ねをしるしあらはすとか名。費之の字右玄妙とゝ〳〵

▲支那の神代なる時迄文字の教なきゆゑにてことの
ふつさうのゝ

同序云ちかを当神代よりの文字なきゆゑに
なをよしゝことのふつさうゝ〳〵
漢の文字をまなびたりしかとも
いろはの字〳〵なる。神代七代の時の字のなをか
なるゝふつさう。今三十一字の字い書ふ盗鳥蒙より

ようこうめ抄云 日本雅抄云

▲今の人の世と成ゝめてゝうしをまつりを崇信めし依字
なれいとて歌波津の字を敬いひ　倭字序よ人の
世とゝなりてゝあるをうけゝ。崇小今人の世とゝなり
といつけられた。うゐ序の河宴にうゐいぞ。今人の
世ゝ始ゝとい。仁德天皇の時代を指ゝ云しめゝ
ゝ物しまをを崇信めし依字ゝい王仁と云者
歌波津の字をゝ。帝よりの代世よ法を信へと
すゝめやせしゝ。妻しゝく歌波よ紀を

▲文淺書山の字ハ大君の徳山をあらはけし故小
大君といい葛城の王ゝ。左大臣清兄てを云ゝ。淺書山

の歌大君の御采女事に依て

▲此二歌を父母らしくて手習ふ人のはじめにし成て

古今仮字序云此二歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人のはじめにもしける云々　栄雅抄云難波津あさか山の此ふた歌は歌の父母のやうにて徳ある歌なれは手習ひそむる歌にてあるといふ。むかしの能書の手本におほくかける也。当は手習ひ始にいろはをならふ事なし。此ふた歌をしらぬ人ひなるまれ云々　若紫抄云まづ難波津をたゞにてならひのしるしと付侍るにや云々　是は物云に手ならひの事をいふ。或抄云初く文字を習ふを手ならひと云　それには此歌。手習の手本にはいろはをする事なし。歌をよまぬる事始には此二歌を手本にしたることゝそ　此説不用カ

▲庶人は蝉丸に依て。近江の海は竹生嶋に依て。さゞ波は三井寺に依て

▲浜の真砂は流るゝ水によむことの葉はよもつきじ

同序云浜の真砂の数多くつもりぬれば。今はあすかゞはの瀬になるうらみもきこえず云々　栄雅抄云此集えらばれて歌の数多くつもりぬれば今はあすか川の淵は瀬になるうらみもきこえずして悦ひとなるで有べしと祝言をいひて。上の段との心を結ばるゝと云々

新後拾

○ともせし浜の真砂の数々に今もつもれる世々のことの葉

▲吉野の糸絶えて松の葉の散うせぬ

同序云吉野の糸乃くれなゐ。松の葉の散うせて。こ
ゝのうゝるうくゝたさうりしゝく　なるうくゝ久しゝさ
佩紅（アカシ）ましくゝろ

。吉野の糸絶えて百代をもむすぶやうのや庭の池水　後水尾院

▲種（タネ）いかゝ思ふ也　同序よ人の心を種としてとあるをそつけう

▲たゝひ時うつるゆさうたに此歌の文字（モジ）あゝば

同序云たゝひ時うつるゆさうたのしひるゝしひゆさむ
あゝも。此歌の文字あるをそゝ　菅雅物云たゝひ
時うつるゆさうのしひるゝしひゆさうふた。今ゝえ
うふ歌の文字ゐいとゝそうてうるゆるをそゝさゝ

長恨歌云時移事去樂尽悲来　上下畧

草根（草根）。家ゝるゝをりていけうゝうゝ移くゆくゝむの花

▲富乃涙もつきせしや　同序云富の涙久しくとゝ

色い歌の抜をもゝうゝ　上の句のつゝゝ。菅雅物云

▲我せこゝがゝくべさ青ゝうゝ　此歌の振（フル）をひゝるゝ

同序よ衣通姫（ソトヲリヒメ）の歌ゝ。日本紀よいゝ下ノ句歌のゝくゝる

今青ゝうゝしゝ。菅雅物云此歌い衣通姫乃

抵ゝく。帝を恋てゝ　ゝ作ふ。歌せこゝがくべさ青ゝ

ゝ。蛛のさゝがくゝ

作ふゝくゝ　釈日本紀云凡歌意者奉待天皇之處

蜘蛛下擔（ルノ）之間為可（ハリキ）偏幸（ヒモテ）瑞之由（シ）石合（スヒ）也佐（サ）々蟹（カニハ）謂

蜘蛛也其躰如蟹住左々原故云矣　摩訶止観曰
蜘蛛掛則必有喜事　矣　西京雜記云蜘蛛集百事
喜　矣　日本紀ナ三云　取意　衣通姫ハ允恭天皇の后、大
中姫の妹ニ、母ハ弟姫（弟ハ婦ノ誤カ）ノ孫ニ坂田ノ大郎女ト云ヒ
ケリ。容姿ハ絶テ美シカリケリ。皇后ノ嫉妬ヲ畏テ、衣通姫ヲ
七日庭中ニ置キ奉リ給フ。衣通姫ノ歌ニ
こもりくの泊瀬の川の上つ瀬に石なしもとな
思ふ。下瀬に石なしもとな。殿屋を高くして、衣通姫を
置奉リ給フ。皇后宮室ヲ河内ノ茅渟ニ遷シテ、居給フ。
衣通姫ニ逢セ奉ラントノ給フ。天皇ハ、夜ヲ
うめ、ハ明ルヨリ、先ヲ思ヒ給フ。

日本紀
○ささらがた弟の紐をとくさげてあまさかる鄙一夜のみ
比ぶ続古今集ニハ小車の弟の紐をとくさげてあまさかる
鄙一夜のみ　釈日本紀云允恭御
歌意者恐皇后之威不累夜之由也佐瑳羅鉞多佐
々良形也言小形文也　矣

▲衣通姫ハ允恭天皇の后ニ坂田大郎女ト云ヒ
衣通姫ハ允恭帝の后ニ坂田大中姫御妹
雅淳毛二岐皇子御女　日本紀云
也容姿絶妙無比其艶色徹衣而晃之是以時人号
曰衣通郎姫也　矣　或説ニ允恭天皇の御子二流
皇子の女也ト云フ　又衣通姫ヲ玉津島明神ト云

細川玄旨図書云衣通姫
ひの字ふるゝとゝ〳〵　帝王編年記云二十代
允恭天皇号雄朝津間雅子宿称天皇仁徳天皇第
四子反正天皇同母弟也甲戌年誕生壬子歳十二
月即位年三十九御宇四十二年癸巳崩時年八十
葬河内国長野陵兵

▲放のとゝ　昇下の泡。　あり出て云泡よ水そ。つ
づゝそ放ヤハなるひも波さんとゝ昇下心　撰集抄
云ものゝ〳〵なる菴をむすびてゝ　親長卿記
云於一条乃場玄阿寮如歌作善ト兵

▲小野小町ゝて衣通姫の流といふけ物
同序云小野小町ハいにしへの衣通姫の流なりゝ
業雅抄云衣通姫の流なりゝハやうなりゝ云流字
とそゞひなりとゝむ沢あまで。つゝなりゝもへ
▲俺ぬ色い为を注業の根をはゝくさゝふあゝいるんと
そゝふ
古今集雑下よ小町ゝ。河云文屋康秀ゝ之河の
ぢうよ成てあゝゝ見じやゝいひやり
なる。ゝ　業雅云世よあゝりひぬ
色い。为を注業ふるゝて。さゝふあゝハいるんと
ゝふてゝゝ
▲色い大江の惟章ゝんゝゝ　惟章ハ平城

天皇五世孫内匠頭従五位下大江千古子也千里
甥也。惟章がムスメ成くトモ時ハ。色ゝくの事ども仕ス

▲文屋の康秀が三河守なる成くトモ時
若い所ゝ侍ける。ヒケ年の間。其国を
治めもちゐしむ。歌ハの守護人のごとし。賢者の
ごとくあるゆゑ国司をいとなみ。ヒケとて又ヒケ
年を経る。又延ヒケとて任をのべ。ゝるもあり。
国政沙汰しゝる人い。やうて一ヒケとて又ゝ
大国小国のゝゝ任ゝ任ゝ任ゝあり 百寮訓要抄文書
和歌色葉集云文屋康秀先祖不知。字文琳。縫殿助ト云云 宗于男ト云云 古傳云陽成院御時人。又淳和仁
明比人。任参河縁或中納言朝康子トゝ
▲ひすれゝ年を経し物を
侯古 ゝれゝもゝゝ物を
西院皇后宮
▲色見ゝて社侍し物をうゝゝゝ
古今集哀。立小町 ゝ小
色見ゝゝゝゝゝ物い世中の人のゝ
業雅云色見ゝゝゝゝゝ
ゝゝて侍ゝゝ物ゝ世中の人のゝ
ゝゝ。ゝ侍ゝゝ物ゝ。世ゝい大江惟章ゝ書ゝ
ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ歌ゝ詠ゝ聞ゝゝ時ゝ
ゝゝゝゝゝゝ
▲侍ゝ歌ゝ物ゝゝゝゝゝゝ

古今序に、二世信、法師の歌、花の色は、雨ふりぬるに、ながめ
ぜしまに、いたづらに、わが身よのなかにふる日、ながめせしまに
師まさりぬるなり、詞を変じて、小野小町がもとよりの
りなるべし、変のかいなき、色めかしき、彼小町、こがれて
おもい人を見ぬ間のあはれとなり、同集よ西一小町
あはれなる間て、彼よ、おもいなきを、我はせきのいとを流せとなれば
▲ちひつぬれいや人の見つるかん　下句、変とあり、せいさあさ
なりを、　古今序に、三小町、変、業雅云、くやしつ、ぬる、
いや人の見えんに、変とあり、さいつ、さめてさまを、
思い業平を、変くるめる、変とあり
▲ちひ、百万、ジュキ、嘉祥、キシ、翁、チヒ、小、志賀、寺、僧、花、一日、業平

新古今序に、世中小、これいろ色の日まて歌ん
新古今序に、小町、変、変のかいいろんの日と
変なる、人の上を歌くへし、彼よ、数、変へ
另なる、をとる、此、変、業花、張、東宮の女房
小大進君が、変、ありて、下句、おいれいろまくいろんと
すくんとを
▲いりすくく、　別、女、張
▲変、乃、業平、思、りのいかりへの另や
・世を捨て、宿を出る、另、発、変、さいむ、変、　興基
▲初めの老て、変、　礼記王制篇曰五十而始衰　六六

日本はじめて老の和名を付たるなり。称名院殿云賀はじめて髭を
を賀たるなり　素問経曰年四十而陰気自半
也起居衰　兵　霊枢経曰人年四十腠理始疎栄華
稍落髪班白　兵

▲一夜とやうゝ　霜色も瑇瑁とやうゝ
玉造云家裝瑇瑁　兵　陳傳鐸歌曰新人新寵任蘭
堂翠帳金屏玳瑁狀　兵　曹憲曰瑇瑁如龜出大海
太者如蓬篠背上有鱗鱗大如扇有文章將作器則
煮其鱗如桑皮任意用之　兵

▲面は金箔をうち　玉造云垣畫丹青　兵　六逸清談
曰梁魚客造象牙沉檀床周鏤金花室鈿　兵

▲戸はい水精をはめ　玉造云戸浮水精　兵
本草細目曰水精一名水晶　名水玉一名石英時
珍曰水精亦頗黎之屬有黒白二色倭国多水精筥
上南水精白北水精黒　兵　述異記曰圖閣構水晶
宮尤極珍異皆出自水府　兵

▲鸞輿屬車の玉衣の　鸞輿とハ鳳をかたどる輿也
屬車とハ天子の供奉の車也　むかしハ
英称の儀　兵　ものゝ　文選西都賦曰乘鸞輿備法
駕　兵　貞観政要云鸞輿在前屬車在後　兵

▲敷妙の枕つゝとやうの　うちかけくハ

袋物といはくいらんねの紙袖。俗百年ふる袋物の袋に袋物の袖にあり。紀美物云あさくいふも。たゝえとも。たゝるおもむき紙こうく東，路州云あさたゝへとい

あさうて感恐もるゝ心しらく

○あさきえの松乃あさこれはいあまて人をゝるめいあひきを

紀美物云松つくとい松なれうとゝ。はきへはぐくと。

人のあ居ハはふすうさんなとい。夫婦必しも一宅

の内よあらく。あうはけうる屋の別の所よ妻いた

めい。かの婦人乃居ゝる家をつまゝ云へし。はきて

いひ出んあふ松はくくというくとゝうく。或説云

松はくくとい。人よ別まて又ゝ松れうまくとゝうく。又一本よ

夫婦松と松をあうぶかを松はくくといあくとゝうく

乃

○家ふりくいうふのうさん松つくつまるさあもあ出へしも

▲君の御の菌乃　あて称ハ世俗の蒲国なり。字数物云

菌祠と云。天子親ゝ居宮の外。居下よいるゝぬ

倭名抄云野王曰菌、蒓又以虎鬚皮為之兵

三才圖會云黄帝内傳曰王母為帝列七宝登真之

床敷蓐浄光之褥疑二物此其起耳兵

▲今ハ土丹生の小屋ゑを家し床ゝうん

土丹生の小屋ハ物うえよ記て。玉造云床鋪敷物

▲諸物益常曼生減法　三井寺よ記て

▲老耳よい益もう　幸家ハ耳さえて。益ゝうさん。

老耳よ老尼を為くいそり

▲花花落葉　拍掎よ須を

▲硯をるゝ〳〵つ　墨をるゝ硯をるゝ。八雲抄云席よそ。上

座をしつゝ下より硯をるゝをあるべゝ

ぶゝ〳〵　猪隠記云墨滴の硯をるゝ〳〵

家

○祢うつくいるゝ沈硯もよ四てんゝふ七枝のものとの墨　光房

▲藤袴家ハ志賀よ須そうれくい家家よ須を

▲云るゝやうゝてつよゝ沈つよゝぬいゝうゝるの家なれい

古今序云小野小町ハ小一の衣通姫の流なり。

あんれるゝやうゝてつよゝ沈。いをぶゝをゝるのるや

めるゝあるふゝるゝ。つよゝかゝぬいゝうゝるの家なれべなる

べゝ〳〵　同云字序云小野小町之歌ハ衣通姫之流也然艶而無気力如病婦之着花粉也　呉雅云家

ハ法〳〵ゝあるゝよゝれ共。つよゝ〳〵ぬいゝるゝ〳〵沈ゝうゝ

るの家なれべゝ〳〵いるゝ。又云ひつての家。也只

ての家。らびめ也ハの家。花こそのゝ家ゝ家れゝる

やうゝてつよゝ〳〵すのゝをゝ文をゝ　又云ゝんゝゝ

ゝる家別ゝ云人ゝあゝり物ゝゝ沈。文者通用ゝる。

或伝よゝんゝるゝい女ゝ。ゝうゝるゝい老ゝ世ゝゝゝゝ　已上古今呉雅抄

▲いゝゝぶゝゝく老の身乃　呉竹集云いゝゝぶゝゝゝくゝい絲所ゝ

ぶんいいゝゝゝくゝゝゝ　僧家杜ゝよゝあん

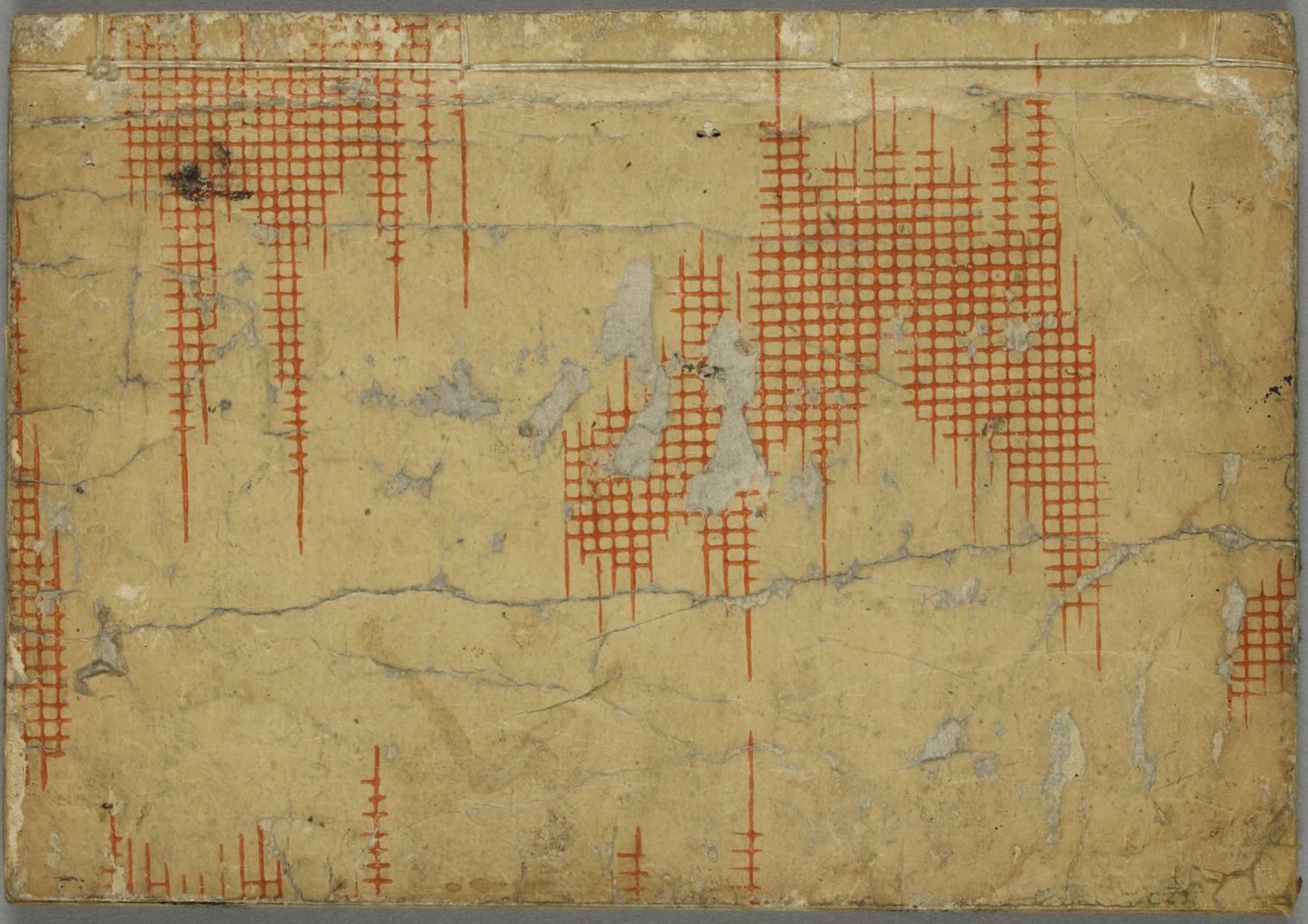
▲ゝよ四ゝ家　海人よ紀ゝを

▲うけろふの小野の小町の石碑より　かけろふの小碑と
いひうけ〜り。蜻蛉の小野ハ和名抄郡の名不詳。
秋津の小碑共云〜
後撰
○あきつしを雲のよそめてうけろふの小碑の名ゆゑ象
日本紀十四云雄略天皇十四年秋八月吉野宮ニ行幸
幸ニ行ふ。河上の小野小鳥ハ鳥名也。
村雨ひろうと侍ふよ蚊蚋来て蜻蛉天皇侍ニ於
是ニ蜻蛉忽ニ来て蚊を食ひ〜蚊去ぬ。天皇
〜蜻蛉をかめて宮を造ふ〜蚊がら引くその
あふを。ひろう羽のうひちふ宮も。大和ものの所ふ
ぐ〜ちをうん。あきつ島大和とよまひ〜ひ〜ひ小
地を蜻蛉小地と云ふ取意小町を石碑と云ふ〜ハ小町
よ注也

▲或ハ系行よ無〜と無〜ハ是乃事をうけ〜る事舞の和
舞の曲よ廻雪と云名あり。依〜かくつけ〜る。蝶舞ハ
童舞と〜ハ童舞のまひ〜。蝶と舞とをまふ〜。
百練抄云兼安三年九月廿五日上皇於法住寺殿
覧童舞ヲ兵帝王編年記云仁平二年壬申三月六
日於鳥羽殿賀法皇五十算舞人樂人殿上人有童
舞ヲ兵

▲〜を行の世〜を〜〜　古今能宇序云〜を行の世〜ふ
さ〜〜。行系のまを〜よ〜〜ハ〜〜　歌服云〜を行

竹の五色。竹の中小指のわれい月の光うやうよ
ゆゑうあれよ竹と云。基後云ふ色竹い紫竹を云。
宮ゝ家家の後ふい屋竹を云。若レ是ふ始て
竹を後ふ人ふ是竹と名つくとゝ。　伊呂波字
類抄云呉竹似篁而下節武葉也　兵
大和物語
○くまゝ竹の世ゝの形ゝ字うゝふ表うちゝセのゝうひもす
▲万歳樂ハ言物小後ふ。豊の明の五節の舞ハ杜ふ後ふ
▲犯人ふ一きハ不犯人ふ也ふ
淮南子曰狂者東走逐者東走東走則同所以東去
則異　兵　後漢書云犯人の表似て大路を走ハ
則犯人なり。西人の表称て人を殺せい西人なり。

▲石年ハ形ふ家ふ
けゝり。止観第五曰荘周夢為胡蝶亦非積歳　兵
供養ふ後て
堀川院百首
○石年ハ形ふ家ふ
此字河海集雑ノ下ふ入
▲さて神もふ
六帖
○ふ
▲初秋のゝう夜
金
○天川すゝ初秋のゝう夜を
▲東ハ安宅ふ後て。羽束師の杜ハ三井ふ後て

胡蝶の舞　荘子云荘周夢為胡蝶翩翩百年悟知
房
ふ
ふ
ふ